

年報

# 津山弥生の里

第1号（平成2～4年度）

1994

津山弥生の里文化財センター

## ごあいさつ

当センターは平成2年11月に開館以来、本市の埋蔵文化財保護行政の拠点として発掘調査から調査報告書の刊行に至る仕事をいたすと同時に、考古及び民俗資料の展示を通じて津山の歴史を紹介し、また、埋蔵文化財の保存整備に努めてまいりました。

埋蔵文化財行政は、開発事業と相関関係にあり、昨今景気の低迷から事前協議・発掘調査ともに減少傾向にありました。今後景気の伸びとともに上向くものと思われます。当面、本市の公共事業に伴う大規模な文化財調査があります。

昨今は開発計画の事前協議も定着が進み、文化財を無視した計画は少なくなってきました。しかし、一部には地域の十分な理解が得られず重要な遺跡の保存が危ぶまれている状況にあります。

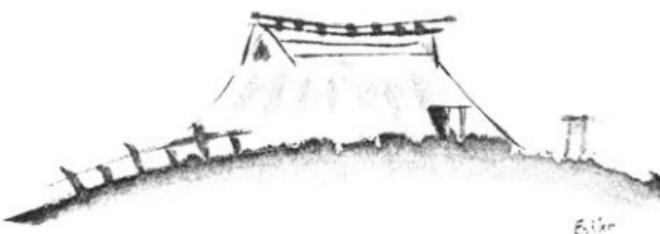
こうした中で、津市教育委員会が当館を拠点に実施した一定規模以上の発掘調査報告書はそれぞれ刊行しておりますが、開館以来3年間の館の運営、埋蔵文化財の調査等合わせて報告するものです。

これまでに寄せられたご協力に感謝を申し上げますとともに、今後とも市民各位のご支援を賜りますようよろしくお願い致します。

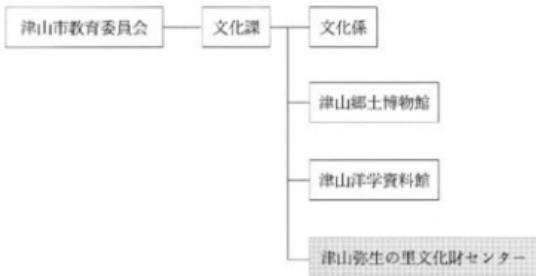
平成6年3月31日

津山弥生の里文化財センター

所長 須江尚志



## 津山弥生の里文化財センター機構図



津山弥生の里文化財センター職員配置 (H 2. 11. 1～H 6. 3. 31)

所長（文化係長兼務） 粕山三千穂 (H 2. 11. 1～H 3. 5. 31、現在文化課長)

(嘱託)	須江 尚志 (H 3. 6. 1～)
主幹	神田 久遠 (H 5. 7. 1～)
次長	中山 俊紀 (H 2. 11. 1～)
主査	安川 豊史 ( " )
主任	行田 裕美 ( " )
主事	小郷 利幸 ( " )
"	保田 義治 (H 2. 11. 1～H 3. 3. 31、退職)
"	木村 祐子 (H 2. 11. 1～H 4. 4. 30、退職)
"	平岡 正宏 (H 3. 4. 1～)
事務員	光井とみよ (H 4. 11. 1～)
嘱託	野上 恵子 (H 2. 11. 1～)
"	岩本えり子 ( " )
"	江見 祥生 (H 4. 6. 1～)
"	家元 博子 (H 5. 10. 1～)
臨時	牧野 博 (H 4. 4. 1～H 4. 9. 30)
"	高山 敏乃 (H 5. 6. 1～H 5. 9. 30)
"	岡田美年子 (H 5. 6. 1～H 6. 3. 31)
"	中谷 幸子 (H 5. 5. 20～H 6. 3. 31)

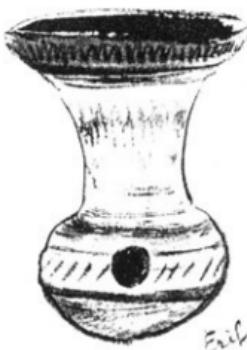
(職名はH 6. 3. 31現在)

### 例 言

1. 本書は、津山市教育委員会・津山弥生の里文化財センターが平成2年度から4年度行った事業概要についてまとめたものである。
1. 墓藏文化財の発掘調査は、当センター中山俊紀、安川豊史、行田裕美、小郷利幸、保田義治、木村祐子、平岡正宏、民俗資料の整理は須江尚志、江見祥生が担当し、本書の執筆は各担当者が行い、編集は小郷が行った。

## 目 次

1. 津山弥生の里文化財センター事業概要 .....	1
(1) 展示事業 .....	1
a.入館者数 .....	1
b.啓蒙・普及活動 .....	2
c.寄贈資料 .....	3
(2) 埋蔵文化財発掘調査事業 .....	4
a.平成2年度調査一覧 .....	5
b.平成3年度調査一覧 .....	5
c.平成4年度調査一覧 .....	6
(3) その他の事業 .....	7
(4) 発掘調査の概要 .....	8
a.柳谷窯址発掘調査概要 .....	9
b.中之町遺跡発掘調査概要 .....	13
c.竹ノ下遺跡発掘調査概要 .....	17
d.上横野小丸山古墳発掘調査報告 .....	21
2. 資料紹介・研究ノート .....	29
(1) 土器の色—着色作業雑感— .....	30
(2) 土の馬 .....	31
(3) 津山市一宮窯採集の資料について .....	33
(4) 美作東苦田の民俗資料—当館収蔵民具について— .....	37
(5) 霧山の祭祀遺跡 .....	39
(6) 津山市金井字根古墳群墳丘測量調査報告 .....	42
(7) 津山市セウ田古墳群墳丘測量調査報告 .....	47
(8) 津山のスタンプ文 .....	52



# 1. 津山弥生の里文化財センター事業概要

## (1) 展示事業

### ◆入館者数

皆さんは「津山弥生の里文化財センター」をご存じでしょうか？

ここは、津山の誇る文化遺産「沼弥生住居跡」のすぐ近くに、平成2年11月に建てられたセンターで、故郷津山の多くの文化遺産（出土遺物、民俗）を、発掘、修理、復元、保存している所です。

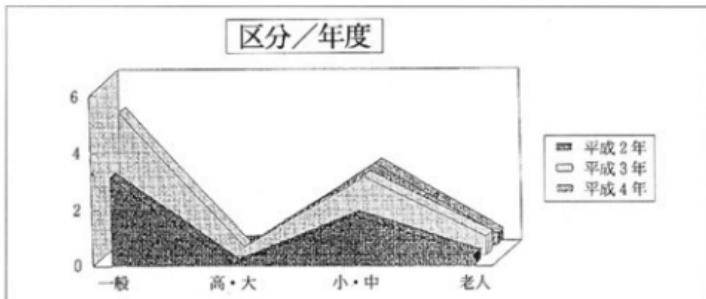
3階の「整理作業室」では、スタッフが出土遺物を修理、復元しているのを見学でき、また民俗関係では1400点余りの収蔵があり、その一部を展示しています。現在の豊かな生活の原点と先人達の暮らしの知恵を見ることが出来るのです！

しかしながら、残念なことに、開館以来現在に至るまで、これらの文化遺産を見に訪れた人は市民の皆様のごく一部に過ぎません。

この3年間の利用の実態を下の表でご覧下さい。

区分／年度	平成2年	平成3年	平成4年	総合計
一般	3,158	5,083	4,376	12,617
高・大	64	325	217	606
小・中	1,765	2,833	2,974	7,572
老人	393	666	434	1,493
合計	5,380	8,907	8,001	22,288

上の表をグラフにしてみるとこの様になります。（単位：千人）



全体に見て一般や小・中学生の利用者数が多いことがおわかりになるでしょう。高校生や大学生はもう少し利用していただきたいと思います。

私達は、市民の皆様に故郷津山の文化遺産、先人達の生きざまを身近に感じていただきたいのです。是非、皆様の生活と知識を豊かにするこの津山弥生の里文化財センターへおいでください。

（江見祥生）

## ◆啓蒙・普及活動

### 【刊行物】

- ・「津山弥生の里文化財センター要覧」(平成2年度)
- ・「アンテナ」津山弥生の里文化財センターニュース第1号(平成3年度)
- ・「津山弥生の里文化財センター展示室案内」(平成3年度)
- ・「アンテナ」津山弥生の里文化財センターニュース第2号(平成4年度)
- ・「遺跡見学のしおり 沼弥生住居址群・美和山古墳群」(平成4年度)

### 【講演会・研究会】

- ・第9回 津山市文化財調査報告会(平成2年度)

平成3年2月16日 場所 津山弥生の里文化財センター2階ギャラリー  
「美作の祭りと歳時～稲つくりを中心として～」 岡山民俗学会理事 竹内平吉郎  
「津山のだんじり～彫物と工匠～」 津市教育委員会 文化課 近藤恭介  
「井戸の祭り～金井笠田西遺跡の調査から～」 津山弥生の里文化財センター 保田義治  
「美作国府跡～重要遺跡確認調査～」 津山弥生の里文化財センター 安川穂史

- ・第10回 津山市文化財調査報告会(平成3年度)

平成4年3月1日 場所 津山市役所2階大議室  
「津山の城と日本城郭史」 奈良女子大学教授 村田修三  
「近長丸山古墳群の調査」 津山弥生の里文化財センター 小郷利幸  
「長畠山北古墳群の調査」 同 行田裕美  
「大開遺跡の調査」 同 平岡正宏

- ・第11回 津山市文化財調査報告会(平成4年度)

平成4年12月12日 場所 津山市役所2階大議室

「作州における中世山城と民衆」 岡山県文化財保護指導員 長畠博

「三毛ヶ池遺跡の調査」

津山弥生の里文化財センター

小郷利幸

「井口車塚古墳の調査」

同

平岡正宏

「よみがえる遺物たち」

同

野上恭子



第10回津山市文化財調査報告会（村田修三先生）

・美作考古学談話会（平成4年度）

第1回（5／2）「考古学の方法」 津山弥生の里文化財センター 安川豊史

第2回（7／4）「旧石器・縄文時代」 同 行田裕美

第3回（9／5）「弥生土器」 同 中山俊紀

第4回（11／7）「須恵器」 同 小郷利幸

第5回（1／16）「古代以降の土器」 同 平岡正宏

第6回（3／6）討論会

・「津山の歴史を掘る」埋蔵文化財発掘調査速報展（平成4年度）

期 間 平成5年2月2日～3月31日

展示遺跡 門の山古墳群

近長丸山古墳群

三毛ヶ池遺跡

井口車塚古墳

大開古墳群

美作国府跡



◆寄贈資料

【考古資料】

田測久美子	須恵器壺1点、須恵器杯身1点、土師器壺1点 津山市国分寺金古神社裏古墳群出土（平成2年度）
-------	--

【民俗資料】

後藤増美	カサ1点、屋根屋ゴテ1点、屋根鉢1点、鋸1点、トビ1点（平成3年度）
畠靖之	まぶし3点、糸網1点、ゆ網5点、養蚕用機具1点、ふいご1点、一斗ます1点、膳一式5点、書籍5点、地券144点（平成3年度）
井上清	ヒコウキマンガ1点（平成3年度）
田村美好	織機1点（平成4年度）
杉本泰子	和紙を漉く簞編器1点（平成4年度）
須江笑子	手鏡1点（平成4年度）
高橋良而	軍服（コート）1点（平成4年度）
今村龍三	煎餅焼型3点（平成4年度）
本島大道	辰持1点、弁当箱入れこ1点、鐘1点、教科書1点（平成4年度）

(2) 埋蔵文化財発掘調査



津山城長柄櫓跡北東隅礎石・排水溝

平成 2 年度調査一覧

No	遺跡の種類及び名称	所 在 地	調 査 原 因	区 別	遺構・遺物の有無	現貌の有無	報告書の有無
1	集落跡 金井途田西遺跡	金井219-1他	開場整備	発掘	弥生時代住居址・弥生土器	有	第39集
2	散布地 野介山地京遺跡	志戸部106-3	宅地造成	立会	遺構・遺物なし	無	無
3	牛廐遺跡 柳谷窯跡	瓜生原1519-2	工場建設	発掘	須恵器	無	本 書
4	集落跡 別所谷遺跡	金井58-11	工場建設	発掘	遺構・遺物なし	無	無
5	集落跡 東一岱字正善庵	東一岱字正善庵	区画整理事業	発掘	古墳・中世集落・須恵器等	無	第44集
6	古墳群 長嶽山北古墳群	国分寺1152-1	宅地造成	発掘	古墳9基・弥生集落	有	第45集
7	散在地 正善庵遺跡	勝率字煙ノ下557	宅地造成	発掘	立会	無	無
8	官衙跡 美作國分寺跡	總社13-1他	宅地化に伴う資料整備	発掘	建物跡他・須恵器・土師器	有	本年度
9	社寺跡 美作國分寺跡	国分寺289-1	住宅建設	立会	遺構・遺物なし	無	無
10	官衙跡 美作國分寺跡	總社447-29他	住宅建設	立会	遺構・遺物なし	無	無

平成 3 年度調査一覧

No	遺跡の種類及び名称	所 在 地	調 査 原 因	区 別	遺構・遺物の有無	現貌の有無	報告書の有無
1	散布地 野介代地京遺跡	野介代地京76-4	倉庫建設	立会	遺構・遺物なし	無	無
2	古墳群 近長丸山古墳群	近長丸字南丸山	資材置場造成	発掘	古墳3基・銅鏡・勾玉他	無	第41集
3	古墳群 大隅古墳群	二宮318他	公園造成	発掘	古墳4基・弥生集落・須恵器	無	本年度
4	集落跡 正善庵遺跡	東一岱字正善庵	区画整理事業	発掘	中世集落・須恵器・土師器	無	第44集
5	社寺跡 美作國分寺跡	国分寺279-1	道路整備	立会	遺構・遺物なし	無	無
6	城館跡 泽山城跡	山下130-1他	住宅撤去後の遺構検出	辨認	瓦類	未 定	未 定
7	官衙跡 美作國分寺跡	總社34-1	宅地化に伴う資料整備	発掘	建物跡他・須恵器・土師器	有	本年度
8	古墳群 円の山古墳群	平福281-1	宅地造成	発掘	古墳3基・須恵器・铁器	無	第46集

## 平成4年度調査一覧

No	遺跡の種類及び名称	所 在 地	調 査 原 因	区別	遺構・遺物の有無	現説の有無	報告書の有無
1	官衙跡 美作国附跡	小原字立川1279	宅地造成	立会	遺構・遺物なし	無	無
2	古墳 井口車塚古墳	河辺506-2	遺跡整備に伴う調査	発掘	帆立貝形占墳 磁石・船輪	有	本年度
3	社寺跡 美作国分寺跡	国分寺字堂下483	宅地造成	確認	遺構・遺物なし	無	無
4	官衙跡 美作国附跡	總社24	防火水槽設置	発掘	溝・柵列 頸虫器・土師器	無	本年度
5	官衙跡 美作国附跡	總社31-2	宅地造成	立会	遺構・遺物なし	無	無
6	墳墓跡 三毛ヶ池遺跡	河辺1150-8	桿土	発掘	墳墓 弥生土器・石鏡	無	第48集
7	官衙跡 美作国附跡	山北6-1	宅地造成	確認	土壤2 頸虫器・土師器	無	無
8	官衙跡 美作国附跡	總社30-4	宅地造成	立会	遺構・遺物なし	無	無
9	官衙跡 美作国附跡	總社11	宅地造成	立会	遺構・遺物なし	無	無
10	集落跡 竹ノ下遺跡	沼77-6地	店舗建設	確認	柱穴 弥生土器	無	本村
11	集落跡 竹ノ下遺跡	沼77-12	店舗建設	確認	柱穴 弥生土器	無	本村
12	社寺跡 美作国分寺跡	国分寺287-1	住宅建設	立会	遺構・遺物なし	無	無
13	官衙跡 美作国附跡	總社36-3他	宅地化に伴う資料整備	発掘	建物跡他 頸虫器・土師器	有	本年度
14	古墳 上横野小丸山古墳	上横野字小丸山1	農地造成	確認	前方後円墳 遺物なし	無	本書
15	官衙跡 美作国附跡	山北字高橋谷65-2	倉庫建設	立会	遺構・遺物なし	無	無
16	官衙跡 美作国附跡	山北468-4	住宅建設	立会	遺構・遺物なし	無	無
17	城館跡 更山城御殿	北町5-7他	道路建設	確認	遺構・遺物なし	無	無

### (3) その他の事業

- ・堅穴住居（沼遺跡）の屋根の葺き替え（平成4年度）

平成4年10月6日～11月6日



屋根葺き始め



屋根葺き風景



屋根仕上げ風景



完成

- ・埋蔵文化財分布調査（平成4年度）

平成5年3月1日～3月12日

津山市河辺・金井・中原地域

- ・津山市内古墳群測量調査

近長四ツ塚古墳群（平成3年度）

平成4年3月25日、27日

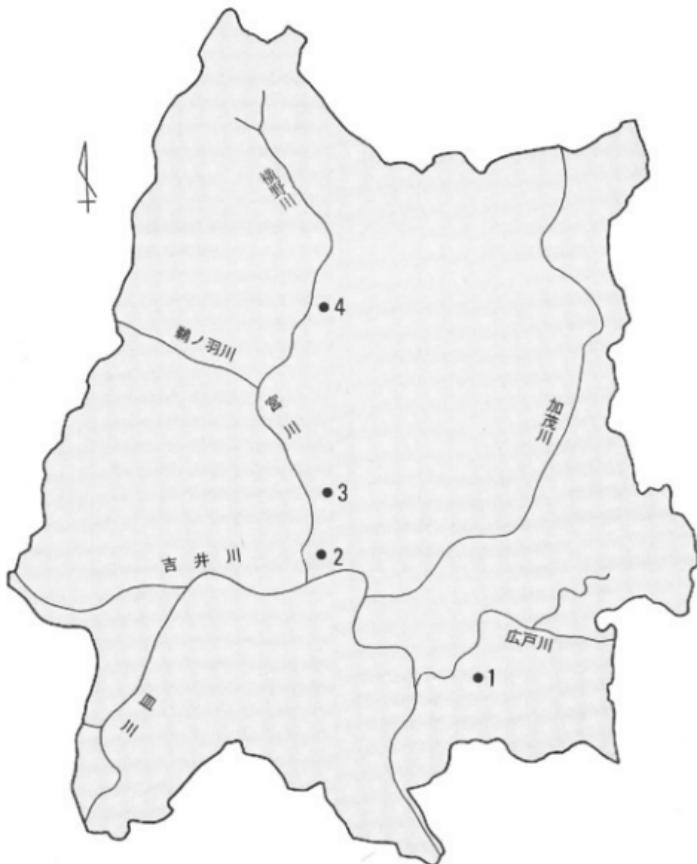
前方後円墳（全長45m）1基、方墳（一边18×16m）1基、円墳（直径11m、13m）2基

大野木塚古墳（平成4年度）

平成5年3月25日

帆立貝形古墳（全長24.5m）

#### (4) 発掘調査の概要



1. 柳谷窯址 3. 竹ノ下遺跡  
2. 中之町遺跡 4. 上横野小丸山古墳

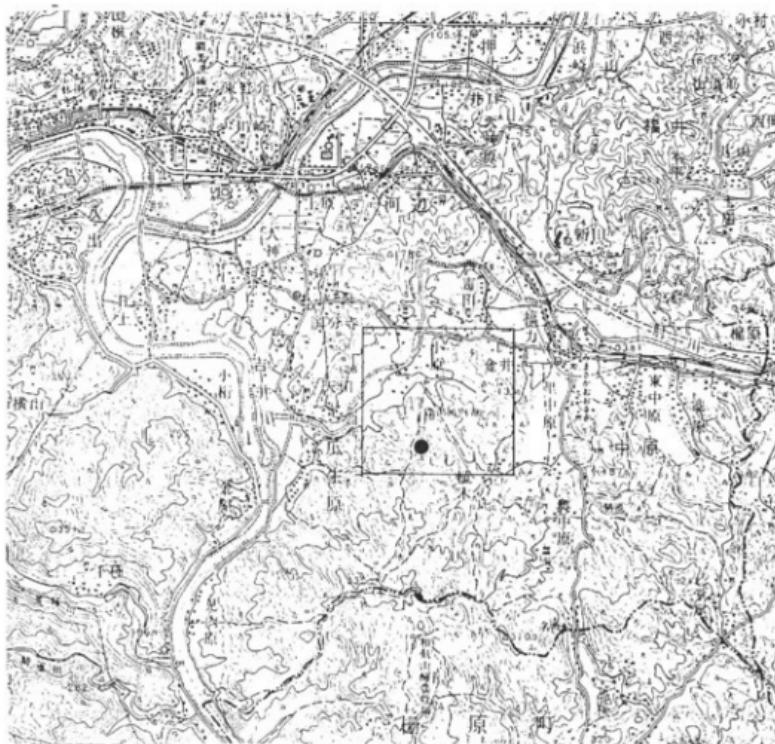
# 柳谷窯址発掘調査概要

## 1. はじめに

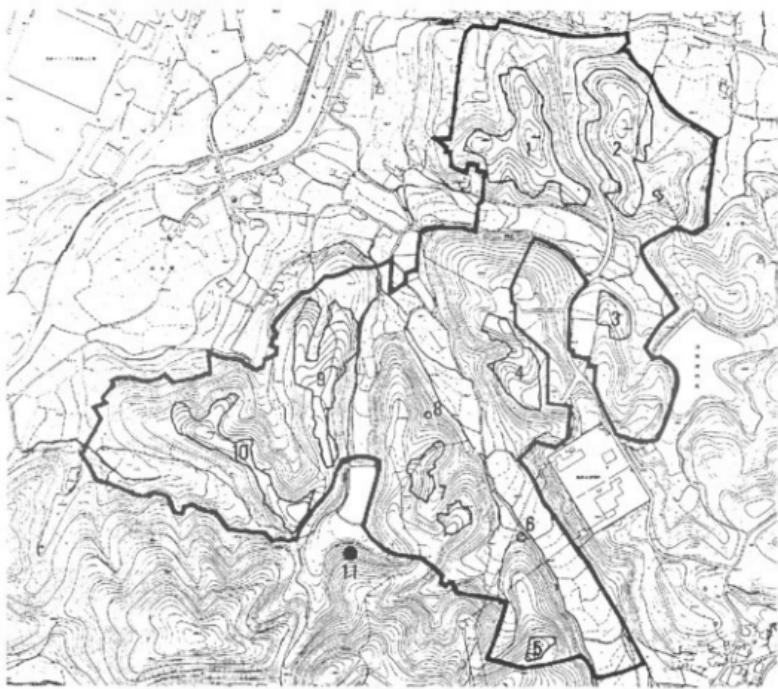
柳谷窯址は津山市瓜生原1,559-2番地他に位置する周知の遺跡である。この遺跡の一部が津山中核工業団地第2期造成工事により削平されることになったため、事前に津山市教育委員会が発掘調査を実施した。調査期間は1990年5月7日～11日までの5日間である。

## 2. 立地と周辺の遺跡

遺跡は津山市と橿原町との行政境を画す和氣山から北に派生した一丘陵の先端に位置する。丘陵を挟んで東西には谷水田が奥深くまで営まれている。遺跡から北側には第1期工事で調査された10カ所の遺跡（一貫西遺跡、一貫東遺跡、深田河内遺跡、別所谷遺跡、崩レ塚古墳群、

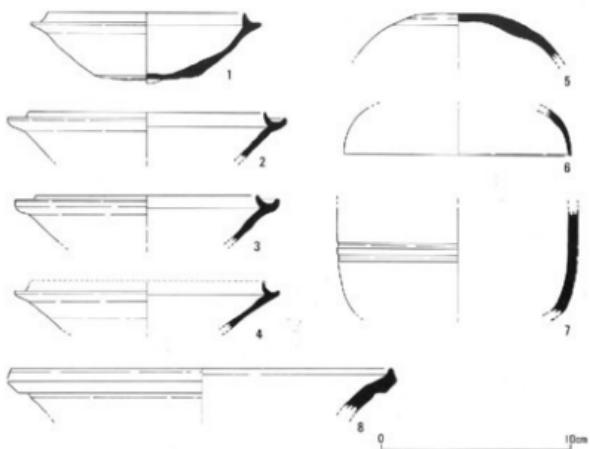


第1図 位置図 (S = 1 : 50,000)

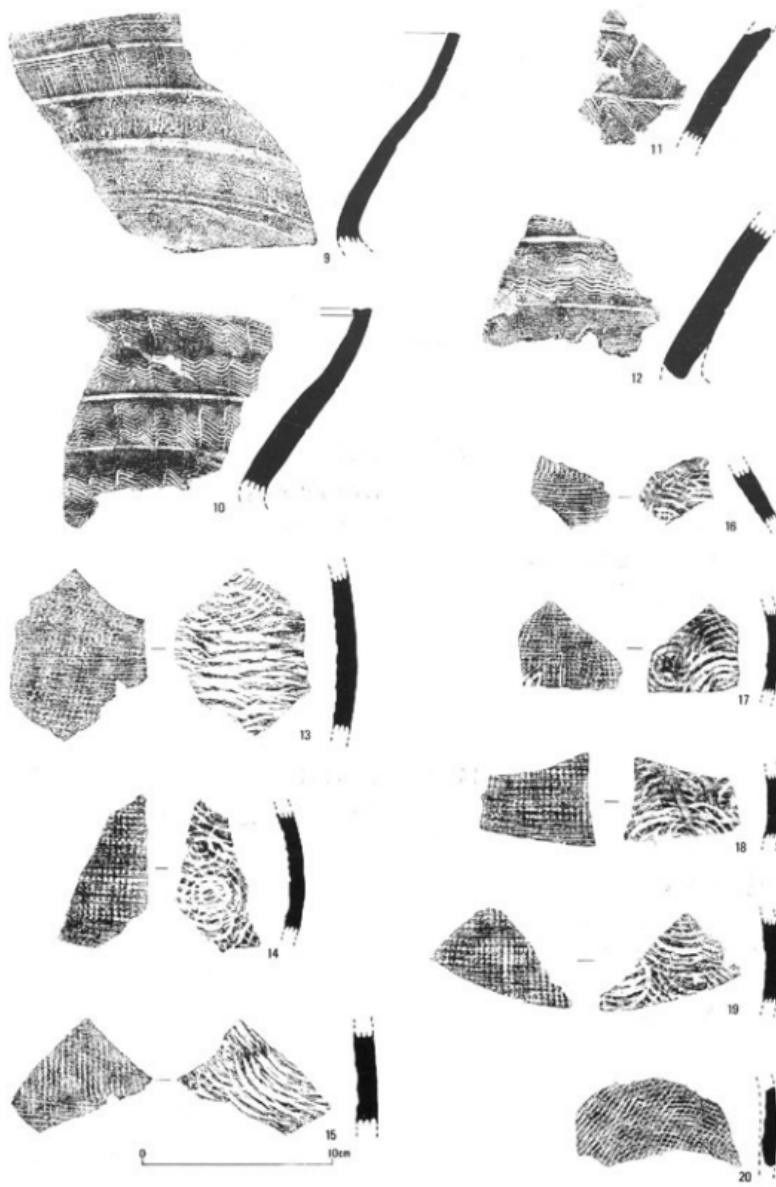


第2図 柳谷窯址と津山中核工業団地内遺跡位置図 ( $S = 1 : 10,000$ )

1. 一貫西遺跡
2. 一貫東遺跡
3. 深田河内遺跡
4. 別所谷遺跡
5. 崩レ塚古墳群
6. クズレ塚古墳
7. 崩レ塚遺跡
8. 柳谷古墳
9. 大畠遺跡
10. 小原遺跡
11. 柳谷窯址



第3図 出土遺物 (1) ( $S = 1 : 3$ )



第4図 出土遺物(2) (S=1:3)

クズレ塚古墳、崩レ塚遺跡、柳谷古墳、大畠遺跡、小原遺跡）が拡がっている。

### 3. 調査の概要

工事は丘陵の先端を切り取るだけのものだったので、窯体の本体及び灰原にはかからなかった。しかし、工事範囲の境界付近では僅かに灰原のものと考えられる黒色土が分布していた。このことから調査範囲は灰原の下位に相当したものと考えられる。ただ遺物としては転落したものと考えられる須恵器片数十点が出土している。

### 4. 出土遺物の概要

全て破片であるため全体の器形は定かではないが、推定する限り杯蓋・身、高杯、壺（大・中）、横瓶、提瓶、鉢等の組成がみられる。代表的なものを図示した。

1～4は杯身である。1は最大径が12cmで2～4に比べてやや小ぶりである。2～4は14～14.8cmを測りほぼ同じ法量をもつ。受け部立ち上がりは内傾し、わずかに立ち上がる。5・6は杯蓋である。7は台付か把手付の鉢と考えられる。胸部外面中位には2条の凹線が施されている。8は小型の壺口縁部である。内外面共淡緑色の自然釉が認められる。9～12は大型の壺口縁部である。いずれも外面は波状文、凹線文を交互に繰り返すことにより加飾されている。13～19は壺等の破片である。いずれも基本的に外面は縱方向の平行叩きの上を横方向のカキ目が切るという文様構成である。内面は同心円の叩き仕上げである。17にはヘラ記号がみられる。20は提瓶の円輪充填部の外面である。

### 5. まとめ

今回の調査は前述したように、窯体の本体には及ばず遺物の出土だけということになった。したがって、窯址の規模、総数、操業期間等については全く知るすべもない。ここでは出土した遺物の所属時期を検討し操業期間の一端を明らかにすることにより、まとめとしたい。

1～4の杯身は口径が小さく器高が低いこと、あるいは受け部の立ち上がりが低いこと等の特徴があげられる。これらの特徴を陶邑編年で求めると、田辺編年（註1）のTK217の古段階、中村編年（註2）のII型式6段階に相当するものと考えられ、年代的には7世紀の前半から中期の時期ということになろう。

（行田裕美）

（註1）田辺昭三『須恵器大成』角川書店 1981年

（註2）中村 浩『和泉陶邑窯の研究』柏書房 1981年

# 中之町遺跡発掘調査概要

## 1. 調査の契機と目的

津山城の南を東西に走る旧出雲街道沿いの城東地区において、歴史的景観の復元を目的とする出雲街道復元計画の一環として、中之町から上之町にかかる城東中央公園の整備計画が策定された。だんじり収蔵庫、コミュニティ施設、休憩所等を整備するもので、平成4年7月に着工し、平成5年4月に公開して地元住民や観光客の憩いの場となっている。本調査は、この整備工事に先立つ確認調査で、平成4年7月16日から7月23日まで実施した。調査面積50m<sup>2</sup>。

調査を行った城東中央公園は、南を旧出雲街道に面し、出雲街道を南北に貫通する小路のひとつである長柄小路に西側を接した南北65m、東西20m程の広がりをもち、行政区画は岡山県津山市中之町19番地および20番地である。

本地区の近代以降の歴史は次のとおりである。1875（明治8）年6月に日新小学校が建てられ、1903（明治36）年12月廃校。1931（昭和5）年からは岡山県津山工芸専修学校、後には青年学校として戦後まもない頃まで利用されている。1950（昭和25）年には城東保育園が建設され、1981（昭和56）年以降城東中央公園として利用されてきた。

中之町は、はじめ津山落の足軽町であったが、1626（寛永3）年に城下町の拡張とともにない町人町となった。町屋北側の武家屋敷であった上之町との境界には東西に流れる「大溝」とよばれる溝が存在した。江戸期における土地利用を示す資料の代表的なものとして、1697（元禄10）年の『美作國家数役付惣町堅横閑賃橋改帳』（玉置家文書、以下『改帳』）と天明期（1781-1788年）と推定される絵図（以下『絵図』）が知られている。『改帳』では、西側から表口7間、裏行14.5間の櫻屋七郎兵衛、表口3.5間、裏行14.5間の大笠屋利兵衛の居住が知られる。『絵図』では同様に西から表口7間、裏行14.5間の西屋左衛門、表口3間、裏行14.5間の山西屋□□の居住が認められる（第2図）。

中之町はもとより、津山城下町の江戸期の遺構はこれまでほとんど知られていないかった。本調査では地下遺構の遺存状況、『改帳』や『絵図』に示される町



第1図 調査地の位置（国土地理院発行「津山東部」を使用、S=1:25,000）

屋の地割り遺構の有無や構造、

そして「大溝」の構造の把握を主な目的とした。

## 2. 研究の概要

T1からT4までの長さ 5 m.

幅2.5mの試掘区4箇所を設けた。T1とT2は「大溝」推定位置に東西に配置し、T3とT4は『改報』や『絵図』に示される町屋を東西に区切る境界推定線上に配置した。

発掘の結果、近世に屬する何

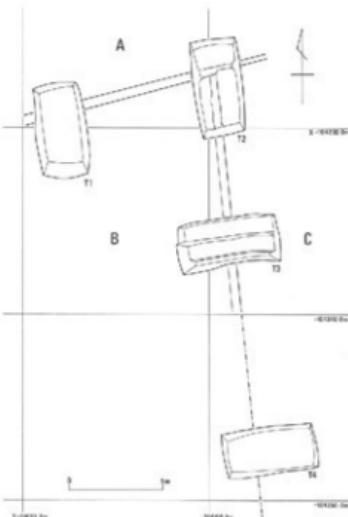
らかの遺構が検出されたのはT1からT3までで、T4は既設建物による擾乱のため遺構は検出されなかった。T1擾乱が調査区の大半におよび、北よりの東西壁面に「大溝」の痕跡を検出しただけである。

最も遺構の残存状況が良かったのはT2で、「大溝」と、町屋の境界と考えられる溝およびたたき面を検出した。

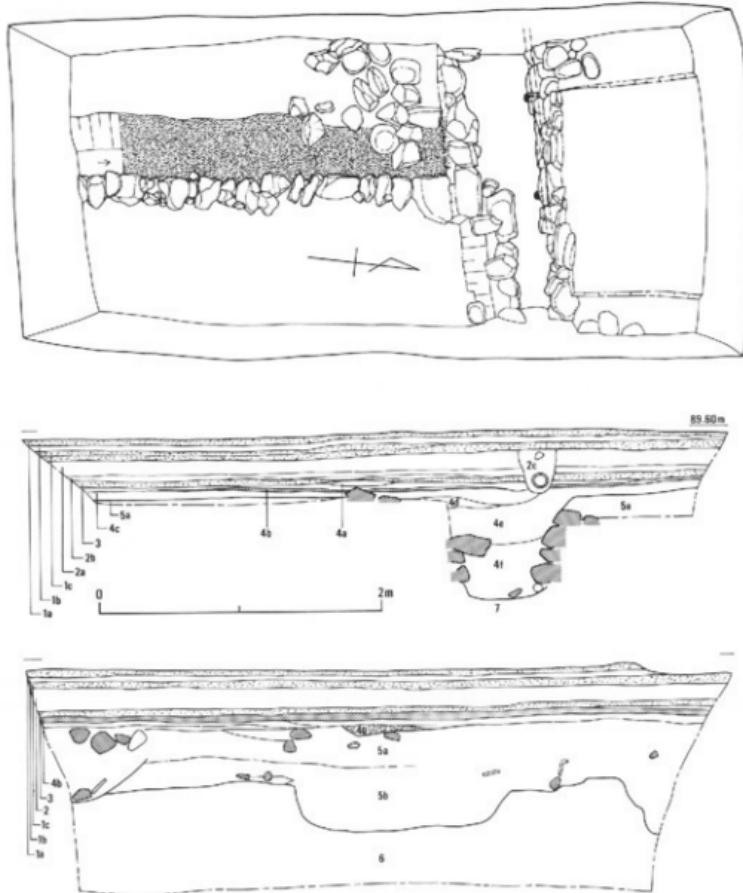
「大溝」は、上面で幅0.7m、下底部の幅0.4m、深さ0.7mをはかる。東半部の南壁はややせり出していて、この部分の溝幅は上面で0.3mと狭くなっている。溝の北側の観察では、地山を穿った後に溝底北端近くに直径5-6cmの丸太杭を0.7m間隔で打ち込み、杭列の北側に同様の木を横にならべて石積みの基礎としている。積石に用いられているのは、玲岩や花崗岩の円礫がほとんどで、まれに角礫がある。これは、周辺地区に現存する「大溝」や旧出雲街道沿いの溝の石積みに角礫凝灰岩の切り石が多用されているのとは対象的で、吉井川の河原から得られる円礫を用いるのが通常であったことを示している。「大溝」の南北両側には褐色土層のたたき面が広がっている。南側のたたき面の中央に西側に1列の石列を検出した。石列の上面は平坦で西側



第2図 天明期絵図（部分）



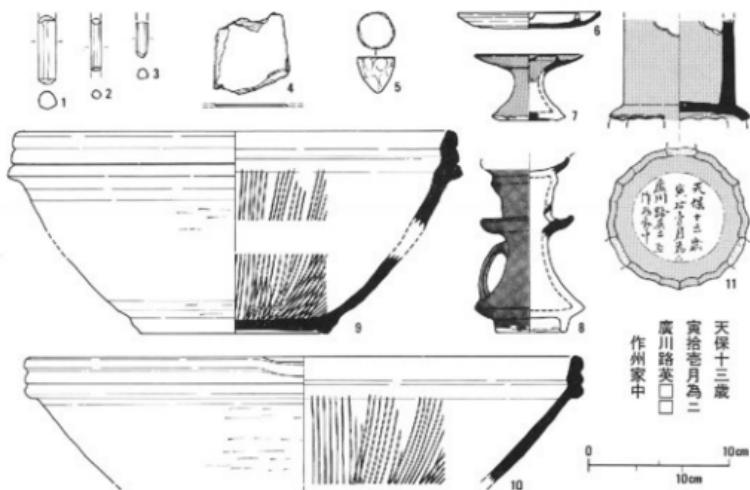
第3図 調査区域図 ( $S = 1 : 300$ )



第4図 遺構実測図（上から順にT2平面図、T2西壁面図、T3南壁面図、S=1:40）

のたき面にそのまま移行する。石列の西側は40cm、深さ10cmの溝となっていて、溝には5-40mmの亜円礫からなる砂礫の充填がみられた。北の「大溝」につながる排水溝である。溝の東側の立ち上がりは緩やかで、この溝がもっぱら石列西側の区画（B）の排水に用いられたことを示している。この南北溝の存在はT3でも確認され、同様の土層（4g）堆積が認められた。ただし石列は検出されない。以上の状況から、石列の西端のラインが東西の屋敷を区切る境界であったと推定される。

T2のたき面の上には間層（4c）をはさんで炭灰層（4d）が一面に広がる。この広がりは、



第5図 出土遺物（1～3：石筆、4：石筆、5：コマ、6：灯明皿、7：灯明皿、8：壺蓋、9・10備前焼鉢、11：墨香炉）<sup>1～5: 3% 他の%</sup>

T3にも達していく、建物の大規模な取り壊しによるものとみられる。4c層下部に位置する「大溝」埋土の中層（4e）まで蝋石製石筆の出土がみられるので、4d層の形成は岡山県津山工芸専修学校の建設に伴う整地作業によるものだろう。4d層の上位には3枚のマサ土（1a・1c・3）層を主体とする整地層が何重にも堆積している。1a・1bは城東中央公園になっての最近の整地層、1cが城東保育園当時の整地層とみられる。以上からT2の5a層上面のたたき面は、城下町当時から明治初期にかけてのものと推定できる。明治初期の日新小学校当時には「大溝」は存在していたものとみられる。城下町の形成過程を示す土層堆積がT3にみられる。最下層（6）は暗褐色軟質の水田土層で、遺物はまったく出土せず、現地表から1.6mまで掘り下げたが基盤層は検出されなかった。上位の5a・5b層は城下町の拡張の際の造成土と思われる。T2では「大溝」の溝底に基盤層が認められるので、城下町に組込まれる以前は南に向かって傾斜した地形で、何段かの水田面を形成していたものと考えられる。4b層と4g層下面の間の数枚のたたき面が江戸時代を通じ長期間にわたる生活面と考えられ、層準の変化はとぼしい。

T2とT3からは、江戸初期から江戸後期にかけて、一部明治期にかかる陶磁器を主体とする遺物が整理箱に1箱出土した。その一部を第5図に示した。1-4は明治初期の学校施設で使用されたもの、9・10は備前焼鉢で17世紀から18世紀。11は香炉と推定され、底面に墨書きがあり、津山藩士間で贈答されたことを示す磁器である。

調査の結果、地下の遺存状況は決して良好とはいえないが、調査区内にA・B・Cの3つの区画を確認した。この区画は文献資料から想定した地割りと正しく一致しており、小範囲の調査ながら所期の目的を果たすことができた。

（安川豊史）

## 竹ノ下遺跡発掘調査概要

### 1. 調査の契機

平成4年8月、津山市建設部から宅地造成の申請合議によって津山市沼77-6番地他(約990m<sup>2</sup>)、及び隣接する77-4番地他(約990m<sup>2</sup>)の竹ノ下遺跡推定範囲内で(株)くらや及び(株)鈴鹿屋が店舗及び工場を新築する計画を進めていることを把握した。

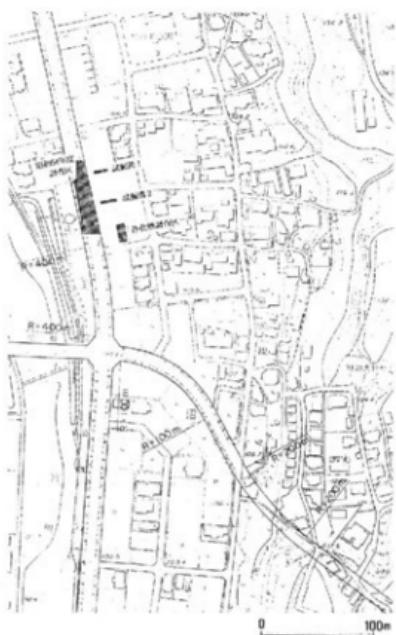
このため、両社に文化財保護法第57条の2第2項に基づく発掘届の提出を依頼。両社と協議の結果、津山市教育委員会が一括して確認調査を実施することになった。

確認調査は、平成4年9月16日から18日に実施、建造物本体建築予定箇所にそれぞれ1本試掘溝を設定、掘下げを図った。この結果、試掘溝2で弥生時代に属するとみられる柱跡多数が検出されたが、いずれも数センチから10センチを残すのみのもので、住居等の遺構は発見されず後世の削平を大きく受けていると判断された。このため、本体工事にあたっては立会で対応することとした。

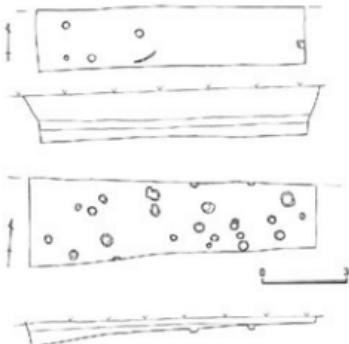
しかし、「くらや」部分では浄化槽設置予定箇所に変更があり、このため平成5年2月この部分の確認調査を追加した。

この結果、浄化槽設置予定箇所で長方形土壙とみられる遺構が確認され、柱穴も散在していたので、この浄化槽設置部分のみ全掘を実施した。

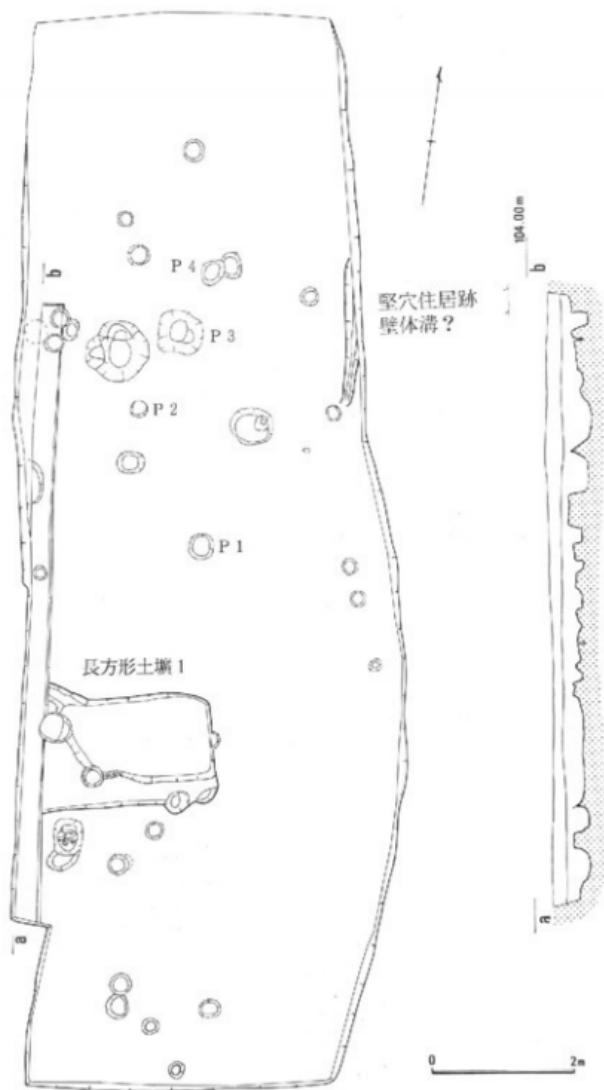
調査は平成5年3月1日から4日までおこない、調査面積は約75m<sup>2</sup>である。



第1図 調査区位置図 (S = 1 : 5,000)



第2図 試掘溝1・2平・断面図 (S = 1 : 200)



第3図 濾化槽調査区平・断面図 (S = 1 : 80)

## 2. 発見遺構

発見遺構は、長方形土壙1、竪穴住居の壁体溝とみられる小溝の一部、及び柱穴35等である。

調査区の旧地形は南に低く北に上昇しており、北部分に遺溝の削平度が高いように観察された。

長方形土壙は、南北1.2m、東西2.5m以上あり、西部分は調査区外へと延びていた。検出面から床面までの深さは、約15cmである。輪郭は端整に掘られているが、床面には南北に沿い低い段がついていた。

埋土中から、偏平片刃石斧1点、同末製品1点及び弥生土器數十片が発見されたが、土器片の大多数は細片で摩滅の度合いも激しかった。

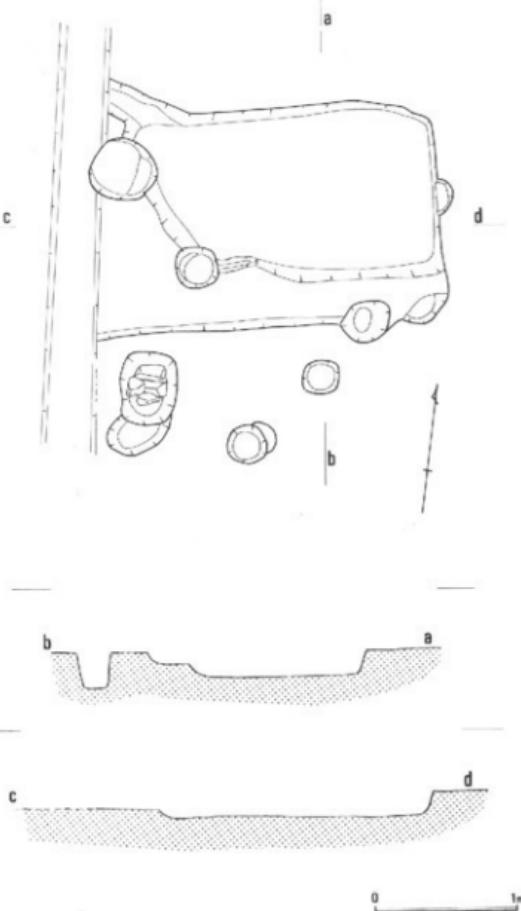
昭和54年度の区画整理事業に伴う調査の際にも、隣接地で機能不明の同様の土壙が発見されたが、その中でも土壙4としたものに形態的に最も類似しているといえる(註1)。

壁体溝と考えられるものは、調査区東端に沿い約2mにわたって発見された小溝で、幅約20cm、遺物の発見はなかった。

柱穴のうちP1、2、3、4から弥生土器片が発見され、別に人頭大の石材が詰められているものもあった。

## 3. 発見遺物

出土遺物のうち、長方形土壙1出土の石斧2点(1、2)、弥生土器4点(3~6)について



第4図 長方形土壙1平・断面図 ( $S = 1 : 40$ )

て図示した。

1は、偏平片刃石斧未製品とみられ研磨に至っていない。2は、石庖丁を転用したとみられる偏平片刃石斧で、基部にその穿孔の痕を残している。いずれも緑色片岩製。

3は、二重口縁を呈する甕形土器口縁部破片。4は、長頸形の壺形土器口縁部片で、端部に2条ほどの凹線を巡らしていたとみられるが摩滅激しくて明確でない。5は、壺形土器口縁部、口縁外面に3条の凹線を巡らしていたとみられるが、これまた明確でない。内外面は横なで仕上げ。

6は大形壺肩部破片。箇描の斜格子文及び鋸歯文で飾り、多条凹線文を巡らしている。内面は横なで仕上げ。

3が後期後葉ないしは古式土師器である可能性がある他、いずれも中期後葉のものとみられる。

柱穴出土のものは、P1で中期後葉に属すとみられる壺形土器底部が発見されている以外、所属時期の明確なものはないが、いずれも、おおむね中期後葉の所産と考えられる。

#### 4. 長方形土壙1の時期と機能

長方形土壙1の所属時期については、埋土中から中期後葉の土器が多数出土しているが、必ずしも確実ではない。後期後葉のものも1片出土しているからだ。前回調査でも後期住居埋土に多数の中期土器が埋没しており、同様に1片の発見とはいへ後期後葉のものと考えたほうがよい。また前回調査発見の長方形土壙の中で、最も類似する土壙4の時期もこれに近い。機能についての手がかりは今回もえられなかったが、住居に付属する施設であろうと暫定的に前回の推測を踏襲したい。

(中山俊紀)

(註1)中山俊紀「京免・竹ノ下遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第11集』津市教育委員会 1982年



第5図 出土遺物  
(1, 2・S=1; 2, 3~6・S=1: 4)

# 上横野小丸山古墳発掘調査報告

## I. 遺跡の立地と周辺の遺跡

### 1. 遺跡の立地

上横野小丸山古墳は津山市上横野字小丸山26-1番地及び26-2番地に所在する。津山市街地をほぼ南北に流れる宮川の上流域である横野川に隣接する丘陵頂部に位置し、標高は約175mで、周辺の水田からの比高差は約20mである。南方には津山市域で有数の水田耕作地帯が広がっており、古墳の立地する丘陵からはその平地を一望することができる。

### 2. 周辺の遺跡

本遺跡の南側の丘陵上には、単位集団の基本モデルとして有名な沼遺跡（註1）をはじめ、太田十二社遺跡（註2）、京免・竹ノ下遺跡（註3）、アモウラ遺跡（註4）など多数の弥生時代の集落跡が存在している。また、弥生時代の墳墓遺跡としては、上原遺跡（註5）、権現山遺跡（註6）、下道山遺跡（註7）などがやはり丘陵上に立地している。古墳時代の遺跡としては、本古墳の南側の平地に集落遺跡である正善庵遺跡（註8）が存在し、正善庵遺跡のすぐ北側の水田中には俗称“熊の頭”と呼ばれる直径20mぐらいの円墳と推定される畠中塚古墳が存在する（註9）。また本古墳の東約300mの場所に帆立貝式の大野木塚古墳が存在している（註10）。

## II. 調査の経過

### 1. 調査に至る経過



- 1. 上横野小丸山古墳
- 2. 沼遺跡
- 3. 大田十二社遺跡
- 4. 京免遺跡
- 5. 竹の下遺跡
- 6. 上原遺跡
- 7. 権現山遺跡
- 8. 下道山遺跡
- 9. 正善庵遺跡
- 10. 畠中塚古墳
- 11. 大野木塚古墳

第1図 周辺遺跡分布図

本古墳は、從来上横野丸山古墳と呼ばれていた古墳である（註1）。今回の調査に先立ち、地番を確認したところ、字名が「小丸山」であることが判明したため、本古墳を上横野小丸山古墳と呼称することにする。

本古墳は昭和53年7月に宅地造成工事により、後円部の約1/3が破壊されておりその後墳丘



第2図 上横野小丸山古墳墳丘測量図 (S = 1 : 250)

上が果樹園として利用されていたものであった。ところが平成4年5月22日津山市教育委員会職員が現地を訪れたところ、後円部のごく一部を残して墳丘が削平されていることが判明した。このため本古墳の現況の把握及び残存状況の確認のために今回墳丘の現況測量と確認調査を行うこととなったものである。

## 2. 調査経過

調査はまず墳丘の現況の地形測量を行った。その結果、地形は予想以上に前方後円墳の形状をとどめていることが明らかとなった。古墳は後円部のはば最大径を測ると思われる部分をわずかに残しており（第2図参照）、まずこの部分の法面の清掃により後円部の築造過程の確認を行った。次に後円部の西側の旧状をとどめている斜面にトレンチをあけ、葺石の残存状態および段築の有無の確認を行った。その際葺石の基底石が良好に残存していたため、基底石を出来る限り追求した。また、地権者の証言から前方部前端および側面の残存状態が良好であると推定される箇所に2箇所のトレンチをあけた。なお、これらのトレンチは現在栽培されている樹木を避けるようにして設定している。

## 3. 調査体制

発掘調査は津山市教育委員会が主体となり実施した。調査体制は下記のとおりである。

津山市教育委員会	教育長 藤原 修己
	教育次長 長瀬 康泰（～H5.3.31）、内田 康雄（H5.4.1～）
	文化課長 森元 弘之（～H5.3.31）、朝山三千穂（H5.4.1～）
文化財センター	所長（嘱託）須江 尚志
	次 長 中山 俊紀
	主 事 平岡 正宏（調査担当）

整理作業員 野上恭子、岩本えり子、家元博子

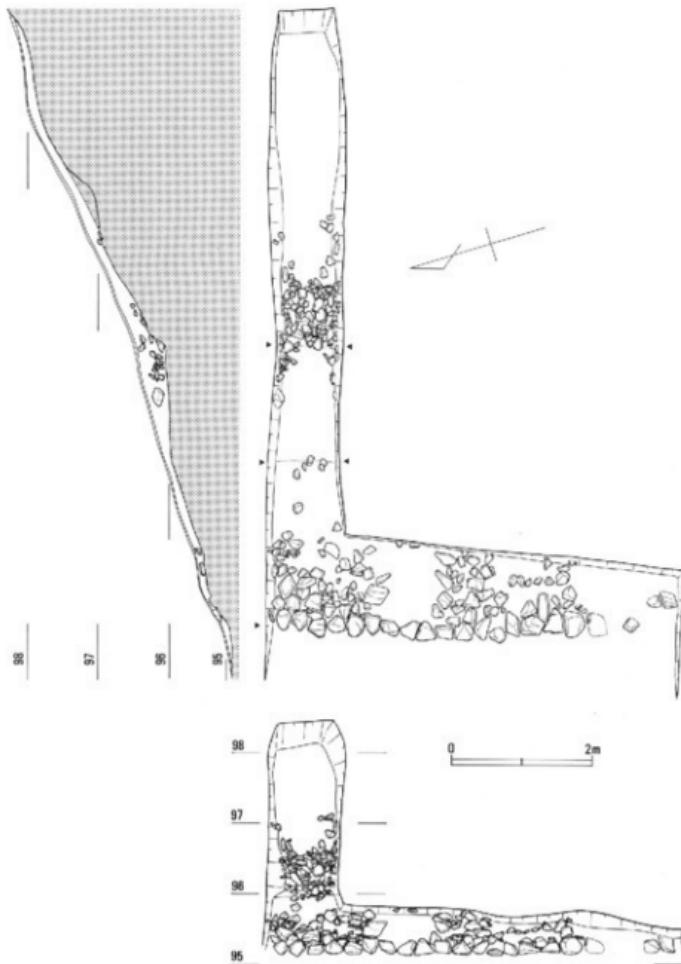
尚、発掘作業は社団法人津山市シルバー人材センターにお願いした。発掘作業員は以下の6名である。

大庭英男、高山登、田口隆、前原一三、前原政信、宮岡富美雄

## III. 調査の記録

### 1. 後円部の調査

地権者の証言によるとかつて墳丘上に葺石と推定される円礫が存在したということであり、現状で古墳の周囲におびただしい数の円礫が認められた。また、現況では段築の有無は明確ではなかった。そのため、墳裾から墳頂部平坦面にかけての葺石の状態及び段築の有無を確認するためにトレンチを設定した。その結果、本墳は二段築成であり墳丘基底部において葺石の最下部にあたる基底石が存在することが明らかとなり、基底石の延長を確認するためトレンチを南北方向に延長した（第3図）。このトレンチの概要は次のとおりである。



第3図 後円部トレンチ平面・立面図 ( $S = 1 : 80$ )

まず埴丘基底部に人頭大よりやや大きめの河原石を貼り付ける。下段斜面には人頭大の河原石を葺いている。基底石下面のレベルは、確認した範囲では水平にそろっている。そして基底部からの高さ約1m弱のところで幅約1.5mの平坦面となり、上段の斜面には現況では平坦面から約80cmの高さまで人頭大の比較的小な石で葺いていた。本来は埴頂部付近まで葺石が存在していたと考えられるが、そのほとんどが落下して平坦面に堆積している状況であった。

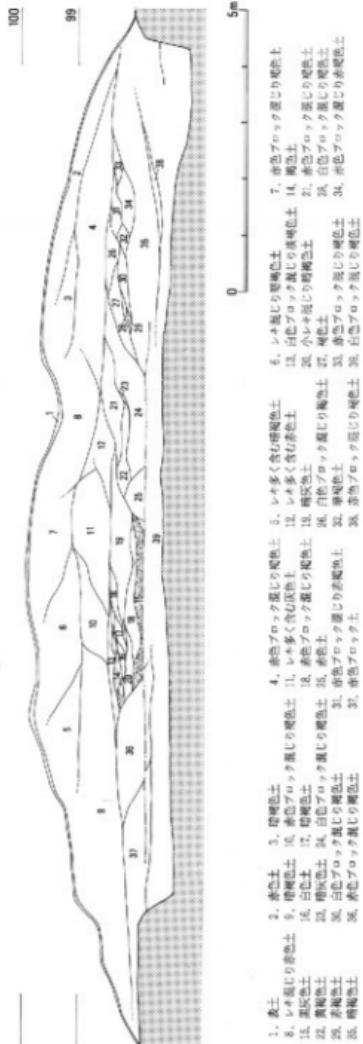
出土遺物は皆無であり、埴輪等は存在しなかつたようである。

## 2. 後円部法面の断面観察

墳丘の断面観察をおこなったのは、後円部残存部分の南側法面である。法面は垂直ではなくかなりの傾斜をもっており、なおかつ凹凸もあるが、残存部分の保護を考え垂直に断ち割ることをせず法面の消掃と若干の掘り下げに止めた(第4図)。掘り下げはおむね地山の上面でまである。そのため観察し得た断面は全長約20m、高さ2m強であり、墳丘の上半分である。

また、この法面は後円部のほぼ最大径の箇所であり、この古墳は主体部が知られていないかったため、主体部あるいはその痕跡が観察できるのではないかと考えられた。土層の遺存状況自体は良好であり、中央や東寄りに盗掘の際のものと考えられる浅い凹みが存在する以外搅乱等は認められず、ほぼ旧状を保っていると考えられる。

墳丘の築造過程は断面で観察する限り3段階に分けることができる。まず最初に地山の上に墳丘の周囲が高くなるように盛土をおこない、その中に互層に盛土し一度上面を東側をやや高くしながらもほぼフラットに整える(第4図土層13~39)。次にやや高い東側に上面を揃えるように今度は西側に盛土をおこなう(土層9~12)。そして最後にその上面に盛土し形を整えている(土層2~8)。この断面観察による限りは埋葬主体部および墓壙は



第4図 後円部填立断面図 ( $S = 1 : 100$ )

認められない。しかしながら見方によっては15が第1段階の墳丘築造時に墓壙を掘り込まれた主体部の可能性があるため、土層15については精査をおこなったが壁面より奥側には続かないことが判明したため、これが埋葬主体の痕跡であるかどうかは明らかにすることはできなかっ

た。ここでは埋葬主体の痕跡の可能性があるというにとどめておく。

盛土中から若干の弥生土器細片が出土したが、図示し得なかった。

### 3. 前方部西側の調査

前方部の築造状況を確認するためにトレンチを設定した。前述のごとく墳丘は大幅に削平されているため、葺石は其底部が確認されにとどまった。南東側の4個並んでいる石の場所で地山が立ち上がっており、この部分が墳端と推定される。その北西側の石は本来墳端基底部の上に積まれていたものが墳丘削平の際に外側に崩されたものであると考えられる。なお、このトレンチから南側にさらに2箇所トレンチを設定したが、ともに墳丘削平時のごみ捨て穴で搅乱されており、墳端部を確認するには至らなかった。

やはり出土遺物は皆無である。

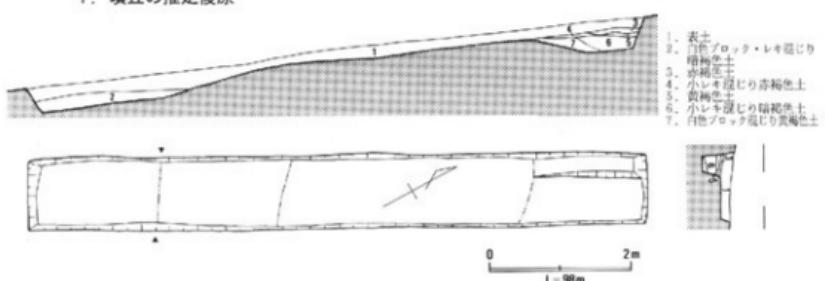
### 4. 前方部前端の調査

墳丘の全長を確認するためにトレンチを設定した(第6図)。表土の下はトレンチの北東側約1.5mを除き岩盤であり、墳丘盛土は完全に削平され地山を整形した部分のみが残存している状況であった。北東部は墳丘盛土を行っている様子が観察された。トレンチの南西端から約2mの箇所でやや傾斜が変換しており(第6図矢印部分)、一応ここが墳端であると考えられる。

ここでも出土遺物は皆無であった。

## IV. まとめ

### 1. 墳丘の推定復原



第6図 前方部前端トレンチ平面・立面図 (S = 1 : 80)

前述の3箇所のトレンチにより、不完全ではあるが程度の墳丘の復原を行うことができよう。

まず、後円部トレンチにおいて墳丘の基底石が良好に残存していたため、そこから後円部の直径が推定できる。そこに前方部の2箇所のトレンチの所見により前方部を復原するならば、全長約46m、後円部径約30m、前方部全面幅約20m、後円部高さ約3.5mの前方後円墳に復原することができる。もちろんこれはごく限られた範囲のトレンチ調査によって導き出された数値であり正確なものであるとは言い難いが、実際の古墳の規模はこの数値から大きく外れることはないであろう。

## 2. 年代的位置付け

本古墳に伴う出土遺物が皆無であり、また主体部が不明なこともあってその所属時期は明らかではない。ただし後円部の現況からみて、横穴式石室でないことはあきらかであるから少なくとも6世紀中頃より以前であることは間違いないだろう。また、本古墳の西側300mに存在する前方後円墳である大野木塚は出土須恵器から6世紀半ば頃の築造と考えられることから、それに先行する時期の前方後円墳であろう。

(平岡正宏)

- (註1)近藤義郎他「津山弥生住居址群の研究」『津山市郷土館考古学研究報告第2集』津山市・津山市郷土館 1957年
- (註2)河本清・中山俊紀・安川豊史「太田十二社遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第10集』津山市教育委員会 1981年
- (註3)中山俊紀「京免・竹ノ下遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第11集』津山市教育委員会 1982年
- (註4)1981~1982年広域林業構造改善事業文化財発掘調査委員会が発掘調査を実施、報告書未刊。隣接するアモウラ東遺跡も調査されている。行田裕美「アモウラ東遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第36集』津山市教育委員会 1990年
- (註5)1966~1967年岡山大学考古学研究室が発掘調査、報告書未刊
- (註6)1976~1977年津山市教育委員会が発掘調査。「図録 津山の史跡」津山市教育委員会 1987年
- (註7)栗野克己・岡本寛久「下道山遺跡緊急発掘調査報告」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告17』岡山県教育委員会 1977年
- (註8)小郷利幸「正善庵遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第44集』津山市教育委員会 1992年
- (註9)註8と同じ
- (註10)『津山市史 第一巻 原始・古代』津山市史編纂委員会 1972年 須恵器・鉄器が出土している。

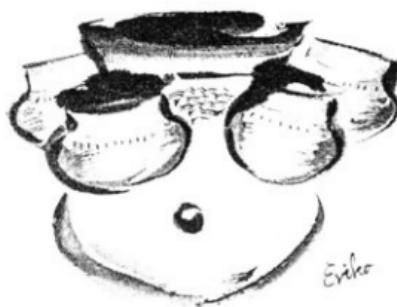


後円部トレンチ



前方部西側トレンチ

## 2. 資料紹介・研究ノート



## 土器の色－着色作業雑感－

岩本えり子

土器は一見、同じような色に見えますが、実に様々な色によって構成されています。

整理作業の最終段階は石膏で復元した部分に色を塗る作業です。まわりの色と同じように仕上げるため、よくよく観察すると様々な色が見えてきます。例えば弥生土器では黄土色、褐色をはじめ、橙がかった茶色、茶色の中でも明るい色から暗い色まで等です。また、須恵器の場合も同じです。皆一様に灰色に見えますが、濃淡、明暗微妙な灰色の世界を作り出しています。焼かれて変化した土器の中には白、灰、黒、赤、黄、緑、青、紫といった色も見えます。さらに、これらの色は太陽の光や照明の光などによっても変化して見えます。このことが原因かどうかは分かりませんが、実測段階での色調表現は人それぞれの個性がありおもしろいものです。色彩感觉の問題であり、致し方ないものかも知れません。

さて、いよいよ着色作業です。複雑な色を出すため数多くの絵の具（リキテックス）を混ぜ合わせます。最初から濃い色を塗ると後で薄くならないので、初めに明るい色を塗り、土器の色を見ながら一色、一色を加えながら色を作り、段々と近い色に仕上げていきます。土器の表面の質感を出すため、スポンジを使用したり、表面が光らないようにするために、つや消し剤（マットメディウム）を交ぜたりもします。時々は全体の色を見るため、遠くから見るようになっています。弥生時代、古墳時代に実際に使用していた土器の「当時の色」はどんな色だったんだろう。発掘調査で出土した「今の色」と同じだったんだろうか。2.000年も1.500年も土中に眠っていたんだから多少は変化してるのかなあ。こんな色をだそうと思って作ったのかなあ。素朴な疑問がわいてくる。

土器の色は多少なりとも絵に携わった自分に新たな色彩感觉をもたらしてくれた。



Eriko

# 土の馬

中山俊紀

1975年の柴保井遺跡の調査で、小型の馬形土製品が発見された。古代の「土馬」と呼ばれる遺品である。

柴保井遺跡は弥生時代の集落遺跡として知られているが、この調査では、古墳時代や奈良時代の土器片なども斜面部分を中心に多く発見された。石群中から発見されたやや柔らかい須恵質の土馬は、おそらく7、8世紀に作られたものであろうが、他に土器片など土馬の作られた時代を限定する遺物は、その石群中からは発見されなかった。

発見された土馬は、遺存部全長13cm、胴部の厚みが5cmほどで、頭から上及び四脚は欠損し見あたらなかった。中空の作りで、尾部基部下に小孔が貫通している。背部には鞍様のものを乗せていたためか、2箇所に帶状の剥離の痕をとどめている。

腰部に「尻がい」を表現したの

第1図 柴保井遺跡構配図（縮尺1/1500）

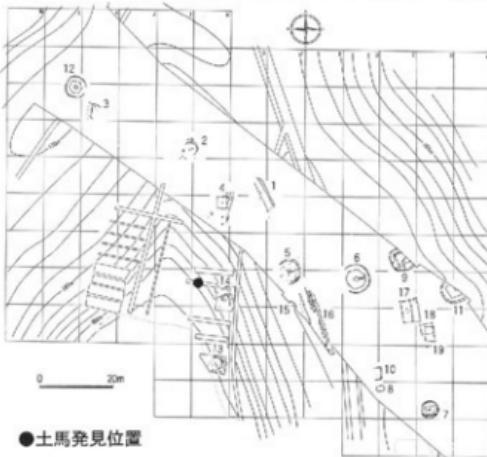
であろう箇で描いた線が2条、鞍部端から尾基部に向かって描かれている。全体として、馬具を装着した馬体を表現していたことは確かである。

美作地方では、津山市総社の美作国府跡から8世紀後半に属するとみられる土師質のものが発見されている（註1）以外、発見例を知らないが、この種の土馬は中部地方から九州地方まで広域で発見されており、その多くは6世紀から8世紀に作られたものとされている。

それらには、土師質のもの、須恵質のもの、あるいは馬具を装着したもの、裸馬の状態のもの、具象的な表現のもの、稚拙な作りのもの等の区別がある。

その用途については、溝や古墳の周濠などから発見されるものがあり、紀記などの古文書の類似記事から、水神と関わる晴雨の祭りに用いられたものであると古くから考えられていた。

近年水野正好は、「馬・馬・馬」と題する論文で（註2）、土馬の発見状況や出土土馬の遺存形態の類型化に基づき、7世紀と8世紀の間に土馬使用の背景に大きな変化のあったことを推定している。



●土馬発見位置

水野は、飾り馬と裸馬の差に着目し、7世紀代の土馬は鞍や馬具を粘土や線描で表現した飾り馬であり、平城京などで発見された8世紀代の上馬は裸馬であって、その差は時期的な違いを示すものであると解釈。また7世紀代の土馬は単体、欠損状態で発見され、必ずしも水との関わりをもたない物も多いとする。

さらに8世紀代の上馬は、都城や国府、郡衙といった行政機構で主として発見され、多量使用、形態統一、溝などの水みちでの使用などの特徴をもつことから、それらは官制に沿って成立したものであると推測し、「大藏」の中にこそ位置付けられるべきものとし、一方、7世紀代の土馬については土着的要素の強いものであることを推測し、「肥前風土記」の「左喜川の川上に荒神が居り往来の人々の半ばを殺すといった所業をなすので、県主などの祖大荒田が土蜘蛛大山田女、狹山田女の教えにより下山田の土をとり人形、馬形を作り、荒神を祭ったところ神の和むところとなった」という伝承記事を引用して、荒神の崇りをしめる祭式に広く用いられたと推論する。

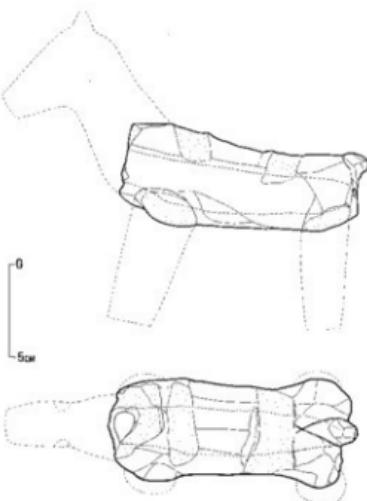
紫保井遺跡出土の土馬は、水野説との関連でいえば、水との関わりの薄い場所で発見されており、飾り馬で、四脚・頸部以上を欠損し、単体発見である点から、7世紀代のものとされる土馬の特徴に一致する。散在する石群から発見された状況からみて、それはいかにも神しづめの祭りの後に遺棄されたもののようにもみえる。

従って水野説にたてば、7世紀のころ紫保井の土馬発見場所には、村人や旅人に多いなる災いをもたらす荒神がひそみ、人々に恐れあがめられていたことになる。

1,300～1,400年の後にひょっこり顔をのぞかせた柄ちた馬形でも、そのいななきに静かに耳を傾ければ、遙か昔、「もううよう」の世界に生きた人々の、嘆き悲しみを静かに受けとめることができるかも知れない。

(註1)岡田 博「官衙」「吉備の考古学的研究」山陽新聞社 1992年

(註2)水野正好「馬・馬・馬 - その語りの考古学」「文化財学報第二集」奈良大学文学部文化財学科 1983年



第2図 土馬実測図 (S = 1 : 3)

# 津山市一宮窯採集の資料について

平岡正宏

## 1.はじめに

一宮窯は、津山市一宮に位置する。1982年4月8日に津山市都市開発公社職員より、松材切り出し用の道路の断面に土器が存在するとの連絡があり、津山市教育委員会職員が現場で確認したところ、道路により切断された崖面の黒色土層中に須恵器を採集した。現場の状況から、数基の須恵器窯跡が重なって存在すると考えられた。以下に紹介する遺物が採集資料である。

## 2. 遺物の概要

採集遺物の主なものは第2～3図である。1は杯蓋である。細かい砂粒を含み、焼成は良好であり青灰色を呈する。天井部はわずかしか遺存していないが観察できる範囲においてはヘラケズリは認められない。器面は内外面ともにヨコナデである。

2～6は杯身である。いずれも細口である。口径は11.0～13.6cm、最大径は13.2～15.8cm、器高は2で約3cmを測り、大きさはばらつきが認められる。受け部から折り曲げによる短く低い立ち上がり部が付けられ、端部は丸く仕上げられている。6は蓋の口縁部と身が融着した状態の個体である。また、2の受け部下面から体部にかけてと6の外側全体に濃緑色の自然釉が付着している。2を除き底部の調整は不明であるが、2は回転ヘラ切り未調整のようである。

7～13は高杯である。16を除き、いずれも小型であり脚部に透かし孔は認められない。部分的に残存する7の杯部は内外面ともにヨコナデであり、底部外面に回転ヘラケズリの痕跡は認められない。8と13の杯内底面の調整は不整方向のナデである。脚部は緩やかに外反しながら開き、接地部は外方へ拡張し端部を屈曲させ端部外側に面をもたせている。7.10.11はその面に1条の沈線を巡らせている。また、8は脚部中位に1条の沈線を巡らせている。13は他のものとは異なり、長脚2段の高杯であると思われる。透かし孔は2方向である。外側全体に濃緑色の自然釉が厚く付着しており、釉によって透かし孔部分は塞がれている状況である。杯部外側の調整は釉の付着により不明である。

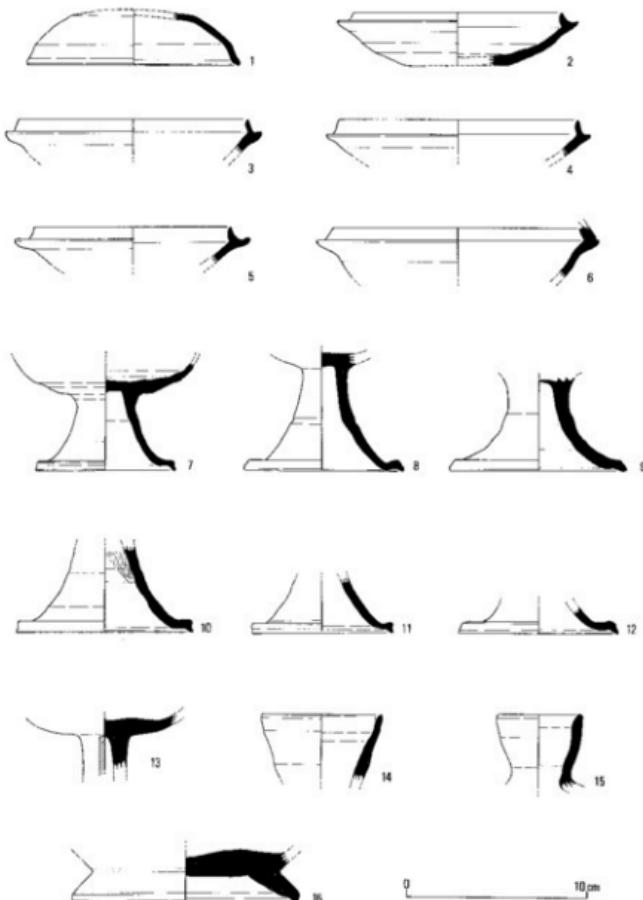
14.15は平瓶の口縁部と思われる。14は直線的に外反しながら開き、口縁端部は丸く仕上げている。口径は4.6cmである。15はやや内湾気味に開き、口縁端部は丸く仕上げている。口径は6.7cmである。ともに内外面ともにヨコナデ調整である。



第1図 位置図

16は長頸壺の脚部分である。「ハ」の字状に開く脚を底面に貼り付けている。脚は接地部分の外側に面を持ち、その部分に浅い沈線を1条巡らせる。壺底面は内外面ともに粗いナデで仕上げられており、脚部分は丁寧なヨコナテ仕上げである。

17～26は壺の破片である。短く外反する口縁は端部に面を持つ。焼成が悪く摩耗のためはっきりしないが外面は平行叩き目の上にカキ目を施しているようである。内面は不明である。18は口縁部の細片である。口縁端部は肥厚し、端部外面には2条の沈線が施される。沈線の直下



第2図 採集遺物（1）（S = 1 : 3）

には9条の櫛描波状文が施され、さらにその下に1条の浅い沈線が施されているのがわずかに観察される。19も口縁部の破片である。やや内湾気味に立ち上がり口縁端部内側に2段に面を持つ。外面は右上がりの籠描き斜線文を施し、その直下に逆に右下りの細い櫛描波状文を施し



第3図 採集遺物(2)(S=1:3)

ている。この文様帶以外は内外面ともにヨコナデ仕上げである。20も同じく口縁部の破片である。やや内湾しながら立ち上がり、口縁部端は水平な面を持つ。外面は口縁部の直下に波状文を施し、その下に2条の浅い沈線を施し、さらに波状文、1条の浅い沈線、波状文、浅い沈線という構成の文様を施している。また外面にはごく薄く淡緑色の自然釉が付着している。21の口縁部の破片は大きく外側に開き、口縁端部は外側に三角形状に肥厚する。口縁端部に櫛描波状文を施し、その下に2条の櫛描波状文を施す。22は胴部から頸部にかけての破片で口縁端部の形状は不明であるが、2条の櫛描波状文を施している。体部外面は平行叩き目で、内面は同心円叩き目であり、頸部は内面に同心円叩き目を施した後に接合しているようである。23～26は胴部の破片である。いずれも基本的には外面は平行叩き目の上に横方向のカキ目を施し、内面には同心円叩き目を施す。24.26は内面叩き目の上をナデ調整している。

### 3. 一宮窯の操業時期

以上一宮窯採集の遺物の概要を述べてきたが、杯の口径にはばらつきがあることや、高杯の脚に透かしのあるものとないものとが存在することなどにより須恵器の年代にはある程度の幅が認められる。ただこれらの遺物は、いずれも灰原からの採集品であり、窯体自体を確認していないということは前述した通りであり、短期間操業された窯が複数存在するのか、複数の窯である程度の期間操業していたのかは現状では不明であるとしか言えない。

それではこれらの須恵器の年代はいつ頃に求められようか。杯身の口径は11.0～13.6cm、杯蓋の口径は11.9cmを測り、杯身の立ち上がりは短く内傾しながら立ち上がっている。また、高杯は長脚の透かしの存在するものと短脚の透かしの存在しないものが認められる。これらの特徴から、陶邑編年のTK209からTK217の古段階、すなわち7世紀初頭から前半にかけてのものと考えられる（註1）。

### 4.まとめ

津山市においては、ほぼ同時期に操業された窯跡として柳谷窯があげられる（註2）。現在のところ美作地域においては古墳等から出土する須恵器によって6世紀初頭、すなわち陶邑編年のMT15の時期に地方窯の成立が求められており（註3）が、その時期の窯跡は確認されていない。

津山市内に存在する須恵器窯跡については、その存在は知られているが実態の明らかなものはごくわずかしかない。そのためこの地域における須恵器の生産体制あるいは流通などについて述べるにはあまりにも資料が不足している。そのため今回は須恵器窯跡の基礎資料の紹介にとどめ、前述の問題については今後の資料の充実を待って改めて言及することとした。

（註1）田辺昭三編『陶邑古窯址群の研究』平安学園考古クラブ1965年

（註2）本書P.9～12参照

（註3）小郷利幸『門の山古墳群』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第46集 津山市教育委員会1992年

## 美作東苦田の民俗資料

—当館収蔵民具について—

江見祥生

一口に民俗と言いますが、これは、私達民間に昔から今日に至るまで受け継がれ、伝え継がれてきた風俗や生活習慣、信仰、芸能等随分広い分野にわたっています。

これらのなかで、当館では、最も生活に密着した農耕機具や、民具などを収蔵、展示しています。展示品を見られて、これらに対する思いは、年齢や、趣味、あるいは生いたちによってさまざまだと思います。「懐かしいなぁ・・・」と感じる年配の方もあれば、「なんだこんなもの！ダサイなー！」と一笑に付す人もいるでしょう。

しかし、果たしてこの程度に過ぎないものなのでしょうか？

人々は、生活をより良くするために工夫して便利な道具を創り出し、改良を重ねてきました。また、生活の中に遊びや安らぎを見つけ、楽しみを創り出してもきました。このようにして、仲間意識、連帯感にさえながら誇りをもって生きてきたのです。

科学する心、豊かさはここから生まれたのではないかでしょうか？「民俗」は、いわば「人間贊歌」の証であり、今の豊かな生活の原点の心を知らしめるものであると思います。

当館では、現在、収蔵している1400点余の品目について、係員がそれぞれ、分類番号、数量、用途、収蔵場所等をコンピューターに入力し、台帳を整理する作業や、復元、修理作業を行っています。近い将来には、コンピューターを使った検索が出来るようになるでしょう。では、民具の収蔵品から、一つ選んで紹介させていただきます。

千歯扱き…17世紀末に発明された脱穀機で、20世紀初頭（大正時代）頃まで広く使われ、足踏み脱穀機にその地位を譲りました。木の台に竹か鉄製の歯を櫛の歯のように埋め込んであります。この名称は歯の数の多さや「千把もこげるほど能率が良い」という意味からのようで、「ゴケタオシ」の通称があります。これは、この道具の発明まで稲の高刈り法では、脱穀は「拔箸（こきはし）」（二本の割り竹の一端をくくったもの）を使っており、生活基盤の弱い後家（未亡人）達の大切な内職でしたが、その仕事を奪ってしまったところから生まれました。



千歯扱き

次ぎの表は、現在までに整理した収蔵品目的一部分です。

(分類大の 0 1 は「生活」、分類中の A は「衣」、分類小の c は「裁縫・洗濯」を表します。  
この中には、「針箱、ひのし、たらい、きぬた等」が含まれます。)

名 称	通 称	分類大	分類中	分類小	数 量
洗い張り	伸子張り	0 1	A	c	3
アイロン	(焼きゴテ 3 本含む)	0 1	A	c	6
卓上ミシン	手提げミシン	0 1	A	c	1
たらい	大半切	0 1	A	c	2
針 箱	裁縫箱	0 1	A	c	3
針 山		0 1	A	c	3
ひ の し		0 1	A	c	5
ひ ば し		0 1	A	c	1
計					24

(分類大の 0 1 は「生活」、分類中の A は「衣」、分類小の b は「理髪・化粧」を表します。  
この中には、「鏡台、櫛等」が含まれます。)

名 称	通 称	分類大	分類中	分類小	数 量
角 鏡		0 1	A	b	1
髪コテ		0 1	A	b	2
鏡 台		0 1	A	b	6
化粧箱		0 1	A	b	1
手 鏡 箱		0 1	A	b	1
バリカン		0 1	A	b	1
こ ん ろ	しちりん	0 1	A	b	3
計					15

(分類大の 0 1 は「生活」、分類中の B は「食」、分類小の a は「貯蔵道具」を表します。この中には、「桶、樽等」が含まれます。)

名 称	通 称	分類大	分類中	分類小	数 量
一斗甕(斗甕)	ウンスケ	0 1	B	a	3
桶		0 1	B	a	3
一 桶	水汲みたご	0 1	B	a	4
お も し		0 1	B	a	3
甕		0 1	B	a	2
醤油瓶(がめ)		0 1	B	a	2
俵		0 1	B	a	3
漬物樽		0 1	B	a	1
味噌樽		0 1	B	a	1
水 甕		0 1	B	a	4
水 甕 の 蓋		0 1	B	a	2
計					28

# 霧山の祭祀遺跡

行田裕美

## 1. はじめに

中山の神が天降ったとされる通称霧山の一体はかっては樹木が生い茂り日中でも薄暗く神秘的な世界を醸し出していた。さらに岩肌が露出したり、巨岩が散乱するなど一見して古代の祭祀遺跡の存在が予測されるにふさわしい条件を備えていた。現在では樹木が伐採され、遊歩道が整備されるなど当時の面影は全く失われてしまっている。

1983年1月6日、現地を訪れた際、磐座と直感した巨岩の周辺から須恵器片1点、土師質土器片1点を採集した。以下、2点の採集品の検討を中心に、霧山の祭祀について若干ふれることにする。

## 2. 位置と立地

霧山は津山市西田辺に所在する。東は黒沢山、西は鏡野町との行政境にあたる樹形山の中間に位置する。この場所は東西両山によって形成されたV字谷の谷頭部にあたり、宮川の上流、鶴ノ羽川の水源地となっている。ちなみにこの川は中山神社より上流を鶴ノ羽川、下流を宮川と呼ぶ。鶴ノ羽川を下流から上流に逆上って行くと、本流が東西2本の支流に分かれている。平面形でみると丁度「Y」字形の流路となっている。遺跡はこの2本の支流に挟まれた地域の丘陵上の緩やかな斜面に位置する。背後には岩肌がのぞいた山がそそり立っている。

## 3. 霧山の祭祀遺跡

前述のように現在で



第1図 位置図 ( $S=1:50,000$ ) (1 : 霧山 2 : 中山神社)



第2図 遺跡スナップ（1：東側右列、2：磐座）

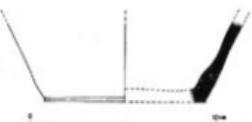
は遊歩道が整備されたり、立木伐採による草木の繁茂等で遺跡の構造を視覚的に把握することは困難である。従って、当時の記憶、スナップ写真によって復元してみたい。

まず、遺跡の範囲であるが、東側と西側にそれぞれ南北に連なる石列がある。長さは20~30mぐらいであろうか。石列は平行ではなく、南にやや開いた台形状の平面形を呈している。両石列の南端間の距離は30~40mであろう。石列の南端を結んだ線から南側は急傾斜の崖となっている。北側に行くと石列は逆に狭くなってしまい、北端での間隔は20m前後と推測される。東西を結ぶ石列はないようである。石列の北端付近から北へは傾斜は急になり、岩肌へと連なっている。岩肌の直下にはかって霧山神社の祠が位置した方形の石積が残されている。

さて、土器を出土した巨岩であるが、東西の石列に囲まれた範囲の中央部付近に数個体認められるものの中の最上位のもので、もっとも大きいものと記憶している。各岩の大きさはまちまちであるが、ほぼ2m内外の大きさであろう。これらのすべてか否かは不明であるが、少なくとも1カ所から土器が出土していることから祭祀対象の磐座であったことには間違いない。

#### 4. 出土遺物

第3図の須恵器と1×2cmの上師質土器の小片を採集した。後者の土器片は図示できなかった。須恵器は壺の底部付近である。長頸壺の場合、高台が付くのが一般的であるが本資料には付かない。従って、頸部は長くなく、口径の大きいタイプの壺と推定される。時期的には8世紀の前半から中頃になるものではないかと思われる。



第3図 霧山出土須恵器 (S=1:3)

#### 5.まとめ

1点の資料だけで多くを語ることは許されないが、若干の予察を述べまとめとしたい。

文献・伝承等によると英田郡権原に現れた中山の神はその後田辺の霧山に天降ったとされている。この霧山は前述したように磐座を中心とした祭祀遺跡である。一連の祭祀行為はいつか

ら始まつていつごろ終焉を迎えたのか定かではないが、少なくとも中山の神が天降った段階には霧山の祭祀は成立していたはずである。その後中山の神は長良獄の現在地に鎮座するのであるが、この時期を6世紀代と考える見解（註1）がある。これに従うと中山の神が霧山に天降った時期は6世紀代以前か近い時期とすることができよう。当然、霧山での祭祀行為の発生もこの時期とそう隔たるものではないと考えられよう。その後も祭祀行為は継続して一定期間営まれたものと思われる。その一時期に今回採集した須恵器から8世紀前半という時期があることがあきらかになった。恐らくこの時期は磐座を中心とした霧山祭祀の最終段階に属するものであろう。

（註1）真弓常忠『古代の鉄と神々』学生社 1985年



Eriko

# 津山市金井字根古墳群墳丘測量調査報告

小郷利幸

## 1. はじめに

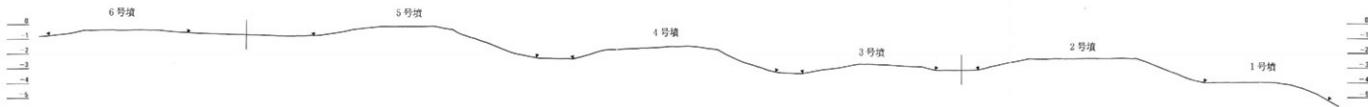
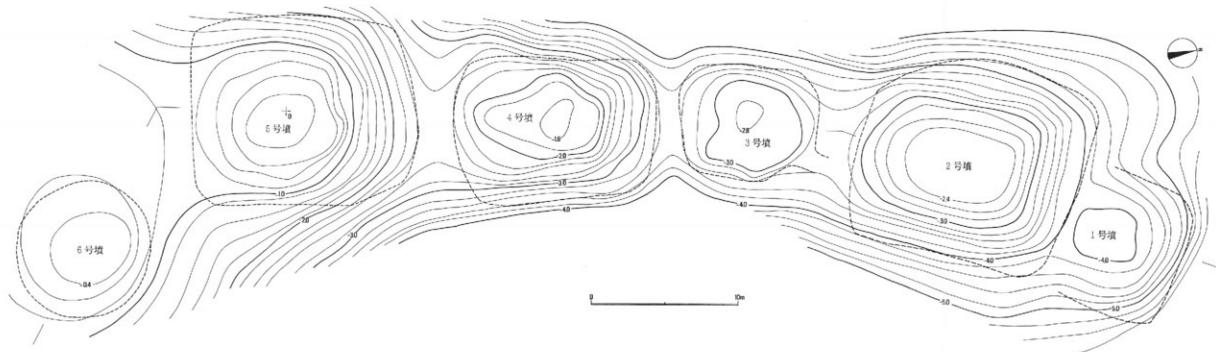
金井字根古墳群は、岡山県津山市金井字字根に所在する古墳群で津山市遺跡地図には、前方後円墳1基と円ないしは方墳5基（第1図206）で構成されるとなっている。本古墳群は、吉井川の支流広戸川沿いに開けた大崎の集落（平野部）を見下ろす小高い丘陵頂部に立地している。周辺の主要な古墳としては、全長32mの前方後円墳と方墳4基、円墳3基の一貫東古墳群（209・210、註1）、全長21mの前方後円墳と直径9mの円墳の茶山古墳群（193、註2）、直径10m前後の円墳9基で構成される稲千古墳群（212）などがありいずれも大崎の集落を見下ろす小高い丘陵に立地している。

## 2. 測量調査（第2図）

測量調査は、平成元年3月22日にセンター職員（行田裕美・保田義治）を中心となり、最高所を0として-20cmセンターで行った。本古墳群はほぼ南北に連なる丘陵の頂部に直線的につくられ、6基の古墳で構成されている。当初前方後円墳と考えられていた最北端の古墳は方墳2基の可能性が大きい。ここではこれら古墳を北から1～6号墳と呼称して以下説明を加える。



第1図 金井字根古墳群位置図 (S = 1 : 50,000)



第2図 金井宇根古墳群墳丘測量図 (S = 1 : 200)

**1号墳** 一辺8~9m、高さ1.2m程の方墳と考えられるが2号墳とは接しており溝による明瞭な区別はされず、2号墳に付随している複がある。ただ2号墳との主軸はずれている。葺石は見られず、頂部には目立った乱掘穴はみられない。

**2号墳** 従来は1号墳と合わせて前方後円墳とされていたが、1号墳との主軸がずれる事から両者は一体のものでは無い可能性が大きい。また、墳端ラインが直線的であるため、南北15m、東西14m、高さ1.6m程の方墳と考えられる。葺石は見られない。頂部北よりに直径1mほどの乱掘穴が存在する。

**3号墳** 2号墳の南3mに位置し、南北9m、東西8m、高さ0.8m程の方墳と考えられるが、北東コーナーには掘り残しらしき部分が存在する。葺石は見られず頂部にも目立った乱掘穴は存在しない。

**4号墳** 3号墳の南2mに位置し、南北14m、東西10m、高さ1.8m程の方墳と考えられる。3・5号とは明瞭な溝で区別されている。葺石は見られず、頂部にも乱掘穴は存在しない。

**5号墳** 4号墳の南2.5mに位置し、レベル的には最高所に立地し南北15m、東西13m、高さ2.2mを測り、本古墳群中では最大規模の方墳と考えられる。葺石は見られないがやや大きめの河原石2個が頂部付近に存在し、本墳に伴うものかどうかは不明である。また、目立った乱掘穴は存在しない。

**6号墳** 5号墳の南側はやや開けた平坦面が形成され、1~5号墳の主軸よりやや東側にずれてた位置にあり、直径9m、高さ0.6m程の円墳と推測される。現状ではかろうじて墳丘としての高まりが確認できるため、古墳でない可能性もある。葺石や目立った乱掘穴は見られない。後世にかなりの削平を受けている可能性が考えられる。

1~6号墳とも出土遺物は知られていない。

### 3.まとめ

本古墳群は、地形測量の結果方墳5基、円墳1基で構成されていると考えられる。これら6基の古墳はその立地状況からある企画性の元、あらわして造られたものと推測できる。ただ、測量調査のため築造された順番や採集遺物などが無いため年代などを特定できない。そこで、墳形の特徴から築造の年代についてできるかぎり考えてみたい。周辺地域に見られる方墳を中心とした古墳群は、崩れ塚古墳群、一貫西古墳群、一貫東古墳群などがある。崩れ塚古墳群は、一辺6~8mの方墳3基と直径5mの円墳1基で構成され前者は箱式石棺、後者は石蓋土壙墓が埋葬施設である。いずれの埋葬施設からも出土遺物はなく、唯一2号墳の周溝内から土師器片が出土したのみである。そのため明確な時期決定はできない(註3)。一貫西古墳群は、一辺7~8mの方墳2基、直径7mの円墳1基で構成され、前者は木棺直葬、後者は横穴式石室を埋葬施設にもっている。また両者とも須恵器が出土しており、方墳と円墳とは明らかに時期が異なり方墳は5世紀末頃、円墳は6世紀末~7世紀初頭である(註4)。一貫東古墳群は、

全長32mの前方後円墳1基、一辺6～12m前後の方墳4基、直径7～10m前後の円墳3基で構成されている。埋葬施設の残りは悪いが方墳は、木棺直葬、箱式石棺、円墳は竪穴式石槨が使用されている。出土遺物は少ないが、須恵器や土師器の特徴からほぼこれら方・円墳は5世紀代に築造されたと考えられている（註1）。

以上から周辺地域の方墳を中心とした小規模古墳群は、規模・埋葬施設の違いはあるにせよほぼ5世紀代ないしはそれ以前（註5）に築造された古墳群と推測される。また、美作地方の方墳のあり方を4～5類型にわけその出現時期を4世紀から6世紀前半までとし、その被葬者を地域政治集団の首長につぐ階層にあてる考えもある（註6）。さらに美作地方においては、5世紀末～6世紀前半の横穴式石室導入前の古墳群は円墳を中心としたものがほとんどで、この方から円に墳形が変化する事とそれに伴い須恵器・鉄器などの副葬品が多量に副葬される現象を一つの社会的変化の画期としてとらえ、これら小規模方墳を中心とする古墳群は基本的に5世紀以前のものであるとする考え方もある（註7）。また、4世紀に逆上る方墳の類例が少ないと、5世紀の方墳への系譜については明瞭でない（註8）。

よって、発掘調査を行っていないため断定はできないものの、これら方墳を中心とした小規模古墳群の時期をある程度推測する事も可能と考えられるが、時期の詳細は資料の増加をもっておこなうとし、ここでは即断せず資料紹介にとどめておきたい。

- （註1）渡哲夫「一貫東遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第43集』津山市教育委員会 1992年  
（註2）保田義治「茶山古墳群」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第27集』津山市教育委員会 1987年  
（註3）小郷利幸・行田裕美「崩レ塚古墳群・クズレ塚古墳」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第31集』津山市教育委員会 1990年  
（註4）行田裕美「一貫西遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第33集』津山市教育委員会 1990年  
（註5）4世紀の古墳群として近長丸山2・3号墳などが考えられる。小郷利幸「近長丸山古墳群」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第41集』津山市教育委員会 1992年  
（註6）土居徹・河本清「美作の方墳」「古代吉備第7集」1971年  
（註7）小郷利幸「門の山古墳群」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第46集』津山市教育委員会 1992年  
（註8）安川豊史「古墳時代における美作の特質」「吉備の考古学的研究」山陽新聞社 1992年

# 津山市セウ田古墳群墳丘測量調査報告

小 鄉 利 幸

1. はじめに

セウ田古墳群は、岡山県津市河辺字セウ田・家の上に所在する。吉井川の支流加茂川左岸の丘陵頂部からやや下った先端部に立地し、加茂川流域に開けた平野部を見下ろす事ができる。周辺の同一丘陵には全長35.5m、帆立貝形の井口車塚古墳（第1図98、註1）や、直径10～20mの円墳14基の天満神社古墳群（102、註2）などの小規模な古墳群が存在する。なお、今回の調査は本古墳群が円墳数基と考えられていたが、その内の2基が前方後円墳になる可能性があるため測量を行ったものである。

## 2. 測量調査（第2図）

測量調査は、平成元年3月28日にセンター職員（行田裕美・保田義治）が中心となり、最高所を0として-20cmセンターで行った。当初3基の古墳として考えられていたが、調査の結果北側の2基が一体のものとして前方後円墳の可能性がでてきた。ここではこの古墳を1号墳南側を2号墳と呼称し、以下説明を加える。

1号墳 西側の後円部と東側の前方部と考えられる部分との丘陵切断部分がなく、明瞭なく



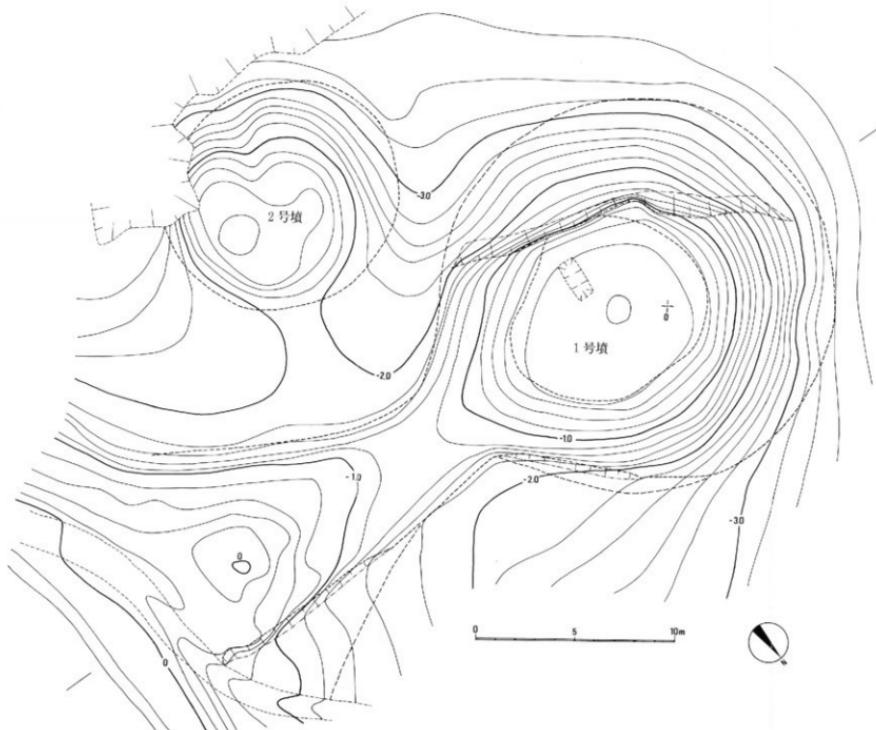
第1図 セウ田古墳群位置図 (S = 1 : 50,000)

びれ部が存在するため両者は一体のものと考えられる。くびれ部は非常に狭く、前方部の墳端ラインもバチ形に開く形状を呈している。ただこの前方部の前端部分にはちょうど林道が通り、さらに北側墳端部分は松の植林のためかなり削平を受けている。そのため墳端ラインは明瞭でない。現地形を観察してもこの林道部分に丘陵を切断した明瞭な痕跡はなく（林道設置の際に埋められている可能性もある）、さらに両コーナー部分も判然とはしない。本墳は丘陵の斜面に立地しているためその制約をかなり受け、後円部については盛土をおこない、前方部については自然地形に若干の整形を加えただけのようにも見受けられる。このように前方部の墳端ラインは明瞭ではないが、この林道付近を墳端とすれば全長約38m、後円部直径19.5m、同高さ3.2m、墳頂平坦面直径10m、前方部長18.5m、前方部幅約18m、同高さ1.6m、くびれ部幅5m、前方部と後円部との比高差はほとんど無く、前方部の方が0.2m程高い。後円部の南側半分と北側の一部が削られ、墳頂部に長さ2m、幅1m程の乱掘穴がある以外には後円部に目立った乱掘部分は無い。くびれ部の南側斜面には河原石による葺石らしき石が散在する。後円部の乱掘穴の土層観察からも、埋葬施設の痕跡は見られない。そのため埋葬施設の構造は不明であり、出土遺物も知られていない。

**2号墳** 1号墳の南側、くびれ部分に隣接して立地する直径12m、高さ2.2mの円墳である。南端部分はかなりの削平を受け大きくえぐれている。埋葬施設は、南側に開口した横穴式石室で天井石が露出し、その一部はすでに抜き取られている。天井石は長さ1m、幅0.7m程の石で3枚残存し、石室は3m以上はあるものと推測される。内部は土砂で埋没しているため詳細な規模や構造は不明である。葺石は見られず、出土遺物も知られていない。地元の人の話では、約40～50年前には石室内に入れたとの事である。

### 3.まとめ

1号墳については、まず前方部前端及びコーナー部分が明瞭でないため前方後円墳と特定するかどうかが問題となる。明らかにくびれ部分が存在するためその可能性は大きい。さらに前方後円墳と見た場合、前方部がバチ形に開き古式古墳の様相と後円部と前方部との比高差がないため新しい古墳の様相の両者が観察される。ここではとりあえず前方後円墳と仮定し時期的な面については、出土遺物がないため岡山県内の前方後円墳などと墳形などを比較しながら検討する事とする。美作地方では前方後円（方）墳は約55基確認されており、その内前方部がバチ形に開く類例としては津山市日上天王山古墳（第1図204）、津山市正仙塚古墳（第1図177）がある。前者は全長55m、出土遺物は知られていないため時期は特定できないものの、墳形の特徴から美作最古の古墳とされている（註3）。この古墳と比べた場合本墳は、くびれ部の幅が非常に狭いのが特徴である。また後者は、全長56mの前方後円墳と考えられているが、墳形は定かではない（註4）。前方部東側はバチ形に開くようにも見受けられるが、西側には見られない。くびれ部に関しては狭く酷似している感もあるが墳端が明瞭でないため比較が難しい。



第2図 セウ田古墳群墳丘測量図 ( $S = 1 : 200$ )

0  
-1  
-2  
-3  
-4

0  
-1  
-2  
-3  
-4

以上2基に関しては明らかに前方部のほうが低く本墳とは様相が異なっている。次にくびれ部が非常に狭い特徴から、くびれ部の幅を後円部直径で割った相対くびれ部幅（註5）で比較すると、本墳は0.26となる。県内には0.3以下のものは見られず（帆立貝形古墳は除く）、一番近似値は山陽町用木3号墳（註6）の0.31、津山市美和山1号墳（註7）の0.33がある。両者とも比高差があり様相が異なっている。また、先の日上天王山古墳は0.47、正仙塚古墳は0.36である。その他県外では兵庫県養父山1号墳（0.2）があり、全長31.7mと本墳とほぼ同規模で前方部もバチ形に開いているが、比高差を見るとやはり前方部の方が低い（註8）。さらに香川県の石清尾山古墳群（積石塚・北大塚古墳（0.23）、註9）などにも見られるが、いずれも比高差があり古式古墳の部類である。

以上、くびれ部が狭く前方部がバチ形に開く類例は古式古墳に見られる特徴であり、さらに相対くびれ部幅を見ても0.3以下のものはそう多くは存在しない。比高差を比べた場合もすべて前方部のほうが低く、本墳のような類例は看取されていない。本墳の場合は地形的な制約が大きく起因している可能性も十分考えられるため、墳形面についてはさらに検討が必要である。

次に2号墳との関係であるが、現地を見る限りでは前後関係は明瞭でないが、この2基以外に周辺に古墳が見られないため、両者には何らかの関係があるものと考えられる。2号墳は横穴式石室をもつ事から少なくとも6世紀後半以降の時期が推測できる。この場合1号墳がほぼ同時期とすると6世紀後半以降の前方後円墳となり、この時期の類例は津山市高野山根2号墳がある（註10）。この古墳は、全長40mとほぼ本墳と同規模であるが明瞭な周溝の存在やくびれ部の幅（相対くびれ部幅0.82）など全体的な形状が大きく異なっている。さらに1号墳の埋葬施設が横穴式石室であると特定する根拠もなく、さらに時期決定は困難を要する。

以上から、1号墳については前方部の形態が明瞭でないため前述のように前方後円墳として認識してよいかが前提となる。そのため、このようにくびれ部が非常に狭く、前方部がバチ形に開き、比高差のさほどない前方後円墳の類例が周辺地域にあるのか（地形的制約の関連も含め）、さらにこの墳形の問題以外にも2号墳との関連からくる時期的な問題などさらに検討が必要である。

- （註1）小郷利寺「井口車塚古墳」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第52集』津山市教育委員会 1994年  
（註2）河本清他「大神原遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告7』岡山県教育委員会 1975年  
（註3）『因跡 津山の史跡』津山市教育委員会 1978年  
（註4）渡哲夫「高野山西正仙塚古墳」『津山市文化財年報1』津山市教育委員会 1975年  
（註5）小洋一雅「前方後円墳の数理」『津山新聞』1988年  
（註6）神原英朗「用木古墳群」山陽町教育委員会 1975年。なお、本墳は前方後方墳として報告されているが前方後円墳とする意見もある。ここでは後者の見解に従った。葛原克人・宇垣正雅「用木3号墳」「前方後円墳集成 中四・四国編」近藤義郎編 山川出版社 1991年  
（註7）『前方後円墳集成 中四・四国編』近藤義郎編 山川出版社 1991年  
（註8）近藤義郎他「養父山古墳群」攝界川町教育委員会 1985年  
（註9）梅原木治「讚岐高松石清尾山石塚の研究」『京都帝國大学文学部考古学研究報告12』1933年  
　　渡辺明夫「北大塚古墳」「前方後円墳集成 中四・四国編」近藤義郎編 山川出版社 1991年  
（註10）大谷晃二他「佐良山古墳群高野山根2号墳について」『古代占墳第13集』古代占墳研究会 1991年  
　　横穴式石室をもつ古墳の場合相対くびれ部幅は0.6以上が多い。

# 津山のスタンプ文

野上恭子

## 1. はじめに

近年の発掘調査にともない数箇所の弥生時代後期の遺跡より、型押しによる主紋様（スタンプ文）を施した土器が出土している。今回紹介するスタンプ文は、下道山遺跡、権現山B遺跡、桃山遺跡、沼京免遺跡、一貫東遺跡、アモウラ遺跡の6遺跡より出土したものである。

以下、各遺跡の概要とスタンプ文について記すことにする。

## 2. 遺跡の概要

### (1) 下道山遺跡

津山市総社に所在する。津山市総社在住の斎藤氏の採集資料である。採集資料のため遺跡の性格は不明であるが、おそらく土墳墓群と考えられる。第2図1～7で、器種は1が高杯、2・6が器台、3・5が壺、4、7は不明である。

### (2) 権現山B遺跡

津山市小原に所在する。民間墓地の造成工事にともない1977年、津山市教育委員会が発掘調査を実施した。遺跡は弥生時代後期の墳墓群で、スタンプ文土器は土墳墓埋土より出土した。第3図8で器種は壺である。



1. 下道山遺跡 2. アモウラ遺跡 3. 一貫東遺跡 4. 沼京免遺跡 5. 桃山遺跡 6. 権現山遺跡

第1図 スタンプ文出土遺跡分布図 (S = 1 : 50,000)

### (3) 桃山遺跡

津山市八山に所在する。津山市総社在住の大林氏の採集資料である。遺跡の性格はおそらく土壙墓群と考えられる。第3図9~11で器種はいずれも壺の頸部に施されている。

### (4) 沼京免遺跡

津山市沼に所在する。都市計画幹線道路工事施工にともない1977~1979年にかけて津山市教育委員会が発掘調査を実施した。弥生時代中期後半から後期の集落、土壙墓群よりなる。本遺跡を大きく特徴づけるものは弥生時代後期の大規模な環濠集落であるが、スタンプ文土器もこの環濠埋土から出土している。第3図12・13で、器種は12が壺、13は不明である。

### (5) 一貴東遺跡

津山市金井に所在する。津山中核工業団地造成にともない1986~1979年にかけて津山市教育委員会が発掘調査を実施した。弥生時代後期の集落、貯蔵穴群、土壙墓群、古墳、中世の建物址等よりなる。スタンプ文土器は段状遺構から2点、貯蔵穴から1点出土した。第4図14~16で器種は14・15が器台、16は壺である。

### (6) アモウラ遺跡

津山市一宮に所在する。岡山県森連の貯木場造成工事にともない1981年に津山市教育委員会が確認調査を実施した。スタンプ文土器は土壙墓群より出土した。第4図17~21で器種は17・20が器台、21が高杯、18・19は不明である。

## 3. スタンプ文の形式分類 (第5図)

これらのスタンプ文は大きく鋸歯文・同心円文・S字(Z字)状渦文の3種類に分類することができる。

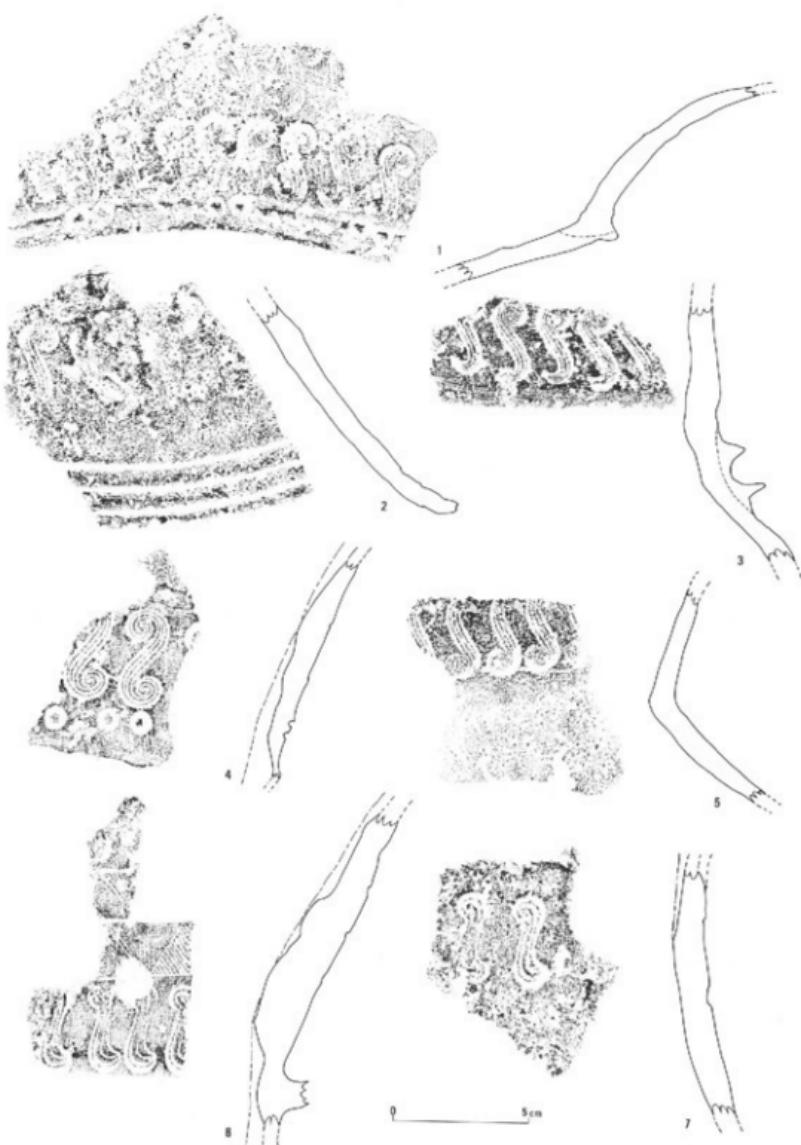
以下、分類基準を明らかにする。

- |               |   |
|---------------|---|
| (1) 鋸歯文       | ①横方向の直線7本による三角形(C-3)<br>②連続した4個の山形を組み合わせた三角形(F-1)   |
| (2) 同心円文      | ①2重圓線を斜線2本で連結した連続文(C-1)<br>②3重圓線を斜線2本で連結した連続文(C-2)  |
| (3) S字(Z字)状渦文 | ①線が単独で渦を巻く(D-1)<br>②複数の線が巻きこむ(A-2)<br>③巻きこんだ線が反転し巻きもどす(B-1・2、D-2、E-1)<br>④片側は巻きこむが片側は渦状を呈さない(A-1・3) |

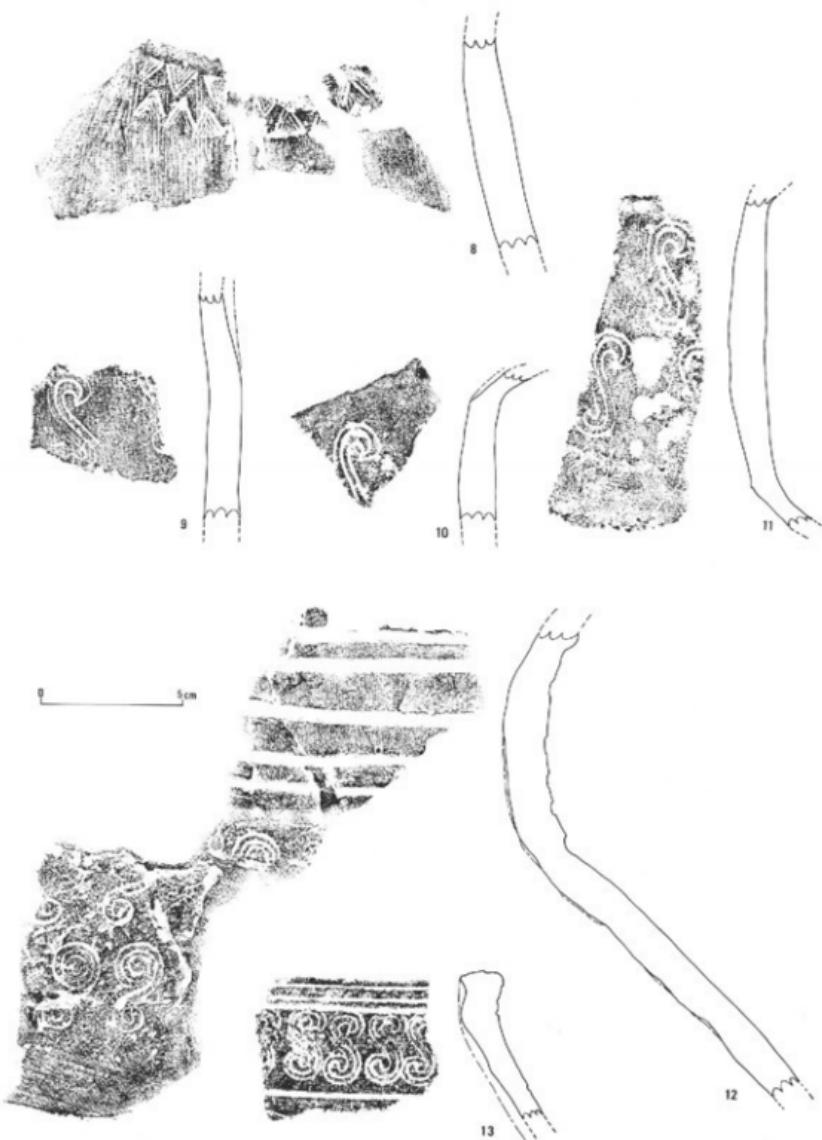
## 4. 施文の具体化

### (1) 鋸歯文

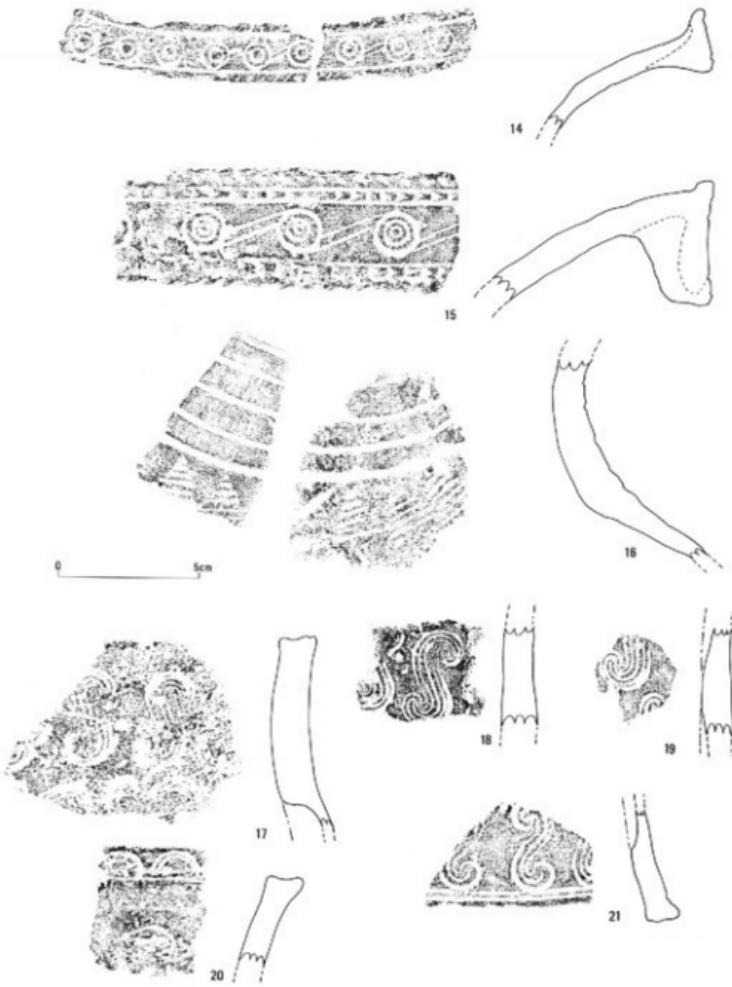
2種とも壺の肩部に横方向に連続的に施文されている。C-3は右上り斜方向に1段、F-



第2図 スタンプ文実測図(1) (S=1:2)



第3図 スタンプ文実測図(2)( $S=1:2$ )



第4図 スタンプ文実測図(3) ( $S = 1 : 2$ )

1は2段に重ね上下逆方向に不揃いではあるが三角形の各谷部を向けて施文している。

(2) 同心円文

2種とも器台の口縁部である。C-2は上下平行に沈線を施し半截竹管を弧状に刺突しながら後退させ、さらにその上下平行に列点文を施している。C-1は刷毛状工具で斜方向に連続刻目文の上にスタンプ文を施し上下を沈線で画いている。

(3) S字 (Z字) 状嗣文

A-1は高杯で杯部外面に2段に重ね下段の下に竹管文を2個づつ間隔をおいて施文している。脚部は、スタンプ文が1ヶ所しか認められないが杯部と同様に施文されていたと思われる。壺の頸部は1段施文しその下に2状の突帯を張り付け、竹管文を2個づつ押しているものと、同原体を180度回転させて施文しているものがある。A-2は器種不明であるが横方向に1段丁寧に施文されその下に竹管文を2個づつ施文している。

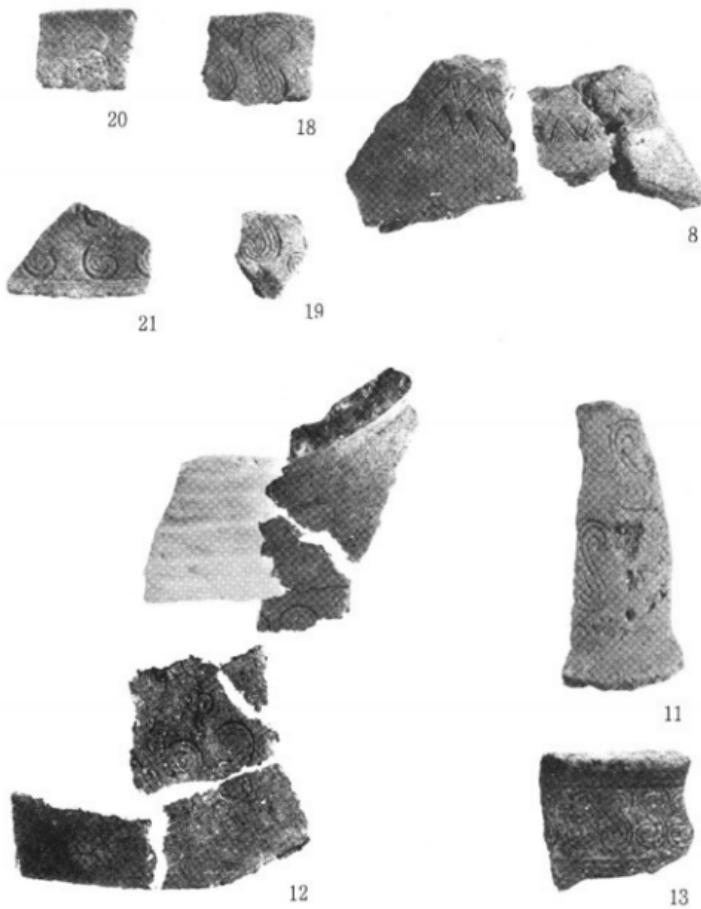
A-3は器台の胸部と思われるが3状の沈線を施こし沈線の間を鋸歯文（この場合は手描き）が頂部を合わせる様に施こされその下に1段横方向に施文され、その下断面台形の突帯を張りつけている。A-4は器台であるが横方向に1段施文されている。B-1は器台であるが2段重ねで上段は縦位に下段は横位に施文されている。B-2は高杯で脚部に横方向に施文されて

		1	2	3	4
A	下道山				
B	アモウラ				
C	一貫東				
D	沼京免				
E	桃山				
F	椎現山				

第5図 スタンプ形式分類



第6図 スタンプ文 (1)



第7図 スタンプ文（2）

いる。D-1は壺の肩部に2段重ねで上段の個々の間に下段が施文されている。D-2は器種は不明である。口縁部に1段横方向（左→右）に間隔をあけることなく（一部重なっている箇所もある）施文され、その上下を平行に回線（上は3条下は1条）を施文されている。

以上、スタンプ文について資料紹介したが、6遺跡で12種類、S字（Z字）状渦文だけで9種を数えることが出来る。これら各々の意匠が何を表現しているのか等興味は尽きないが、今後の自分の課題として、新たな調査出土例を待ちながら追究して行きたいと思う。



Erikor

---

年報

## 津山弥生の里

第1号（平成2～4年度）

平成6年3月31日発行

発行 津山市教育委員会

津山弥生の里文化財センター

岡山県津山市沼 600-1

印刷 有限会社 行廣印刷

岡山県津山市川崎609

---

